

大津市歴史博物館調査報告書 10

春挙翁追懷座談会

令和七年（二〇二五）三月

大津市歴史博物館

## 刊行にあたって

令和三年（二〇二二年）、大津市中庄（旧膳所町中庄）出身の日本画家、山元春挙（一八七二～一九三三）の別邸「蘆花浅水荘」（重要文化財）において、「春挙翁追懷座談会」と題した一七〇枚あまりの原稿用紙が確認された。

春挙没後の四十九日法要後間もない時期に、春挙に近い友人や弟子が集い、三回にわたって開催された座談会の記録である。座談会に参加して原稿をまとめた美術記者の神崎憲一（京都日出新聞社）が、「全貌を窺ふ一端にもと茲に其一部の要を摘録」したと記すように、原稿は会話全体の抄出記録である。

本報告書（史料集）では、荒い筆致でまとめられた原稿を、難読な記述や複雑な追加・削除等について整理して翻刻するとともに、改題と注を付し、併せて影印図版を掲載した。

本座談会記録の前書に、記録の意図を神崎は「後考の資とする事」と述べている。本報告書が今後の山元春挙研究の一助となることを願うものである。

最後に、史料集の刊行にあたって、お世話になった方々に深く感謝の意を表するものである。

令和七年三月

大津市歴史博物館

## 〔目次〕

刊行にあたって	1
目次・凡例	2
一、春挙翁追懷座談会解題	3
二、史料編（追懷座談会）	
第一夜	10
第二夜	21
第三夜	32
三、注釈	38
四、図版編	46

## 〔凡例〕

- 一、本書は、記恩寺所蔵「春挙翁追懷座談会」（本館寄託）を翻刻し、図版を掲載した史料集である。
- 一、解題・翻刻・注釈は、横谷賢一郎（本館学芸員）が担当した。翻刻については、松竹京子氏（小早川秋聲研究家）による翻刻文（第一夜・第二夜）を参考にした後、改めて原本から翻刻作業を行った。なお、校正は横谷に加え、五十嵐正也・高橋大樹（いずれも本館学芸員）、山口真有香（滋賀県立美術館学芸員）がおこなった。また注釈の一部についても山口氏のご協力をいただいた。
- 一、翻刻にあたっては、原本がおそらく速記録から再構成したものと思われる、後日に書き入れ（挿入）、修正（抹消）、消込みなどの痕跡が多くみられる。本書は史料集という体裁を重視することから、原本の体裁を尊重しながら、組版上の事情により追込み形式とした。また、原本における抹消箇所はそのまま示し、当時の挿入・入れ替え等の校正指示は反映させることにした。なおこれらの箇所は傍線部を引いて示してある。
- 一、翻刻の字について、変体仮名は現行の仮名に改めたが、旧字体・異体字については、原本どおりとした。
- 一、判読不能の文字については、その字数分を□で示し、字数不明の場合は「」として表記した。
- 一、抹消箇所（塗りつぶし等）の箇所は網掛けを施し、文字の大きさを小さく示している。また、墨線・朱線による抹消はもその文字に打消し線で示した。
- 一、傍注について右側に「」で括弧して示した。その際、誤字と思われるものは正字を付し、原本どおりの場合は「ママ」とした。
- 一、原本の原稿用紙の左上角には、頁番号が1から176で付されているが、一部欠落が存在するため、全一七三紙となっている。翻刻文においては、それら頁番号を各紙冒頭文字部分の右傍に「1」などと伏した。図版確認の際に参照されたい。
- 一、注釈については、その箇所の右傍に【注1】などと示した。

## 一、春拳翁追懷座談会解題

本史料は、昭和八年（一九三三）に没した日本画家、山元春拳を偲び、特に近い関係者が同年に寄り合つて開催された追懷座談会（以下、座談会）を、同席した記者が記録し、抄出筆記した草稿である。

この度、清書前の草稿の記述状態を整理して翻刻を行い、史料集として発刊するものである。

### ①史料名称

『春拳翁追懷座談会』（宗教法人記恩寺蔵）

※原稿用紙のタイトルを採用。題箋のタイトルは筆者の墨書と認定困難なため。

### ②山元春拳について

山元春拳（日本画家、俗名寛之助、一八七二—一九三三）

旧膳所町中庄（春拳没年に合併して現在は大津市中庄）の出身。一時、五個荘の小杉家へ養子に出たが山元家へ復籍し、打出浜学校を卒業。明治一六年（一八八三）頃、野村文挙に師事、春拳と号す。入門三年目に師ともども円山派の森寛齋に入門する。同一九年には日本青年絵画研究会<sup>〔注1〕</sup>で一等褒状、同二三年には第三回国勸業博覧会で褒状、第一九回京都美術博覧会で四等、翌年には京都私立日本青年絵画共進会で二等二席、同二五年、日本美術協会第五回展覧会で二等褒状と、若手画家にとっては重要な展覧会において褒状・受賞を重ねる。

同三一年、京都市美術工芸学校教諭に就任し、同三三年には山元画塾の

第一回展が開催される。以後、「同攻会」から「早苗会」と名称を変えつつ画塾の規模は拡大し、竹内栖鳳の竹杖会や菊池契月の菊池塾、西山翠嶂の青甲社などと並ぶ京都画壇の一大勢力へと伸長した。

春拳自身は同三七年に視察で渡米するとロッキーマウン脈に登山する。同四二年、京都絵画専門学校教諭を兼任する（のち教授）。大正五年（一九一六）帝室技芸員を、同八年帝国美術院会員を拜命。

作品表現としては精緻な現地写生に加え、写真も併せて活用した作風を展開した。円山派の写生画山水を、近代の山岳絵画表現へと脱皮させた。四〇代後半から故郷の地に造営を始めた画室兼別邸の蘆花浅水荘（大津市中庄）は、一九九四年に国の重要文化財に指定された。

### ③形態

二〇字×一〇行の二〇〇字詰原稿用紙一七三枚を、コクヨ製バインダーにて挟む。

### ④題箋

中央に「追慕座談会」の墨書。

その左脇にマジック書きにて「昭和八年八月頃 神崎憲一氏／筆記」

左下余白に「第一」、右端余白に「一ノ 一〇七頁」

※本題箋は、恐らく原稿用紙を封入していた旧封筒を切抜き、題箋に代えたもの。

### ⑤表紙

バインダーの厚紙表紙上に、旧封筒の切抜きと思われる題箋をセロハンテープ貼り。

⑥ 法量（単位はmm）

バインダー…縦二六六×横二一九、原稿用紙…縦三三六×横一六三

⑦ 錯簡

落丁は無く、文章の不連続もないが、ノンブルが〔60〕から〔65〕へ飛ぶ誤記がある。また〔76〕と〔77〕の間に余分な一葉が存在する。したがって、原稿用紙は全一七三葉でだがノンブルは〔76〕までである。

⑧ 筆者（記録者）

神崎憲一。合資会社京都日出新聞社（京都新聞社の前身）の美術記者。

⑨ 座談会の次第

- ・開催場所…高倉通丸太町の春拳邸か（前書に「霊前に會し」とある）
- ・開催日…八月二十九日（春拳の命日七月二二日に基づく四十九日）か。前書に「其陰中霊前に會し」とあり、「陰中」は「中陰」同様に七七日を意味するので、座談会は四十九日法要に合わせて第一夜が開催されたとみられる。<sup>〔注2〕</sup>
- ・法要に参列した古い故人関係者がまず招集され、翌日以降に門人を第二夜・第三夜に招集したと考えるのが妥当であろう。なお、題箋にも「昭和八年八月頃」と書き込みがある。
- ・趣旨…神崎の前書によると（「1」）、「春拳先生を追憶しやうと其陰中霊前に會し、或時は旧友旧知の人達の一團が語り更かし、或る夜は門人弟子の一群が寄り合つた」とされている。
- ・出席者数…二五名（延べ出席者数三二名）

⑩ 出席者（語り手） ※出席者達の略歴は注を参照

各夜で集つた出席者たちの構成は次のとおりである。

第一夜

徳力幽雪（日本画家、元西本願寺絵所）、革島彦一（革島医院院長、医学博士）、神阪雪佳（日本画家・凶案家）、田中主治医（春拳のかかりつけ医）、田中亀太郎（春拳の古馴染み、実業家）、中島華鳳（二世代年上の先輩画家）、郵松雲外（森寛齋門の兄弟子）、山元匡子（未亡人）、山元清秀（春拳長男）、川村曼舟（春拳門人、早苗会会長）、林文塘（春拳門人、早苗会評議員）

第二夜

川村曼舟（前出）、林文塘（前出）、玉舎春暉（春拳門人、早苗会常議員）、川畑春翠（春拳門人、早苗会中堅）、岡文涛（春拳門人、早苗会評議員）、西井敬岳（春拳門人、早苗会評議員）、案本一洋（春拳門人、早苗会常議員）、中村春楊（春拳門人、早苗会中堅）、山元匡子（前出）、山元清秀（前出）

第三夜

川村曼舟（前出）、中島春鷗（春拳門人、早苗会評議員）、村瀬秀月（春拳門人、早苗会中堅）、植中直斎（春拳門人、早苗会評議員）、久保田竹文（春拳門人、早苗会評議員）、古谷一晁（春拳門人、早苗会評議員）、小村大雲（春拳門人、早苗会古参）、三宅凰白（春拳門人、早苗会常議員）、庄田鶴友（春拳門人、早苗会評議員）、山元匡子（前出）、山元清秀（前出）

第一夜は旧友・旧知の人々を中心にした人選で、第二夜は山元画塾「早苗会」の古参・中堅以上の画家が中心となつている。第三夜は「早苗会」の若手役員の割合を増やした人選である。以上のように、各夜で参加者の傾向を明らかに変えている。これにより、第一夜は春拳の生い立ち・親族や独立前後の交友、第二・第三夜は画業や画塾を中心とした思い出話に花が咲き、エピソードが芽づる式に語られ、結果として多くの成果を得た座

談会となっている。

### ⑪ 筆記の過程

本座談会の記録は、鉛筆によって原稿用紙に筆記されており、さらに多くの線引き・削除・訂正・挿入・塗潰し・消しゴム処理の痕跡が認められる。そして鉛筆の加減次第で塗潰しや削除の下に、当初の記述が確認できる部分もある。それらポツ対象の記述こそが、かえって興味深い情報であるものもあり、更新の前後が判明する。また、「8」から「12」にいたるまで、筆記のほぼ全てに渡ってごく薄い赤線が引かれている。五頁にまたがって引かれている点も異例であるが、削除の赤線としては極めて薄い濃度であり（一見では視認することが難しい）、さらにこの部分には、追加語句の書き込みが存在する。結論として、この部分は「削除ではない」と判断した。他所にも同様な処理がいくつも存在する。ついでには、翻刻にあたっては、それらをつぶさに観察した上で、おおよそ以下のような筆記の過程を推測した。

ア まずメモとして速記的に座談会の語りを大量に記録。

イ メモのうち春挙や画塾を中心に興味深い思い出語りを抄出。

ウ 抄出した語りを話題ごとに章立てして原稿用紙に記述。

エ 記述後に確認し、検討箇所には薄い赤線を大量に引いていく。

オ 再確認後、さらに検討を要する箇所には濃い削除線を施す。

カ 当初記録のメモと対比させていき、挿入すべき記述を挿入。

キ 校正を行い、誤記や訂正等に対して鉛筆塗潰しや訂正を行う。

ク 最後に青鉛筆にて各章のタイトルを挿入する。

以上のような過程を経て、最終的には印刷冊子として頒布することを視野に入れて様々な修正を経た、清書前草稿と思われる。

### ⑫ 座談会記録の史的価値

春挙は昭和八年七月、満六一歳で没している。当時、画塾「早苗会」の運営は、塾頭格の川村曼舟を筆頭に、古参から若手も含む役員たちで執行する体制となっており、春挙の手を離れていたものの、帝室技芸員にして帝国美術院会員に任命されている京都画壇の重鎮であった。同時に、没する四か月前の三月には、淡交会展に「奥山の春」「阿蘇高原」を出品するなど、画業への意欲も衰えてはおらず、蘆花浅水荘へ生活の比重を移しつつあったとはいえ、隠居生活とはほど遠い意気軒昂ぶりであった。同じ森寛齋門で兄弟子の郵松雲外は、「まるで私の死後自分で墓位建てたる」（35）と、同年四五月頃の春挙の様子を証言している。即ち、殆どの人にとって早すぎる春挙の死なのであった。

それゆえ、春挙を取り巻く関係者―師森寛齋門の兄弟弟子、古い馴染み、同世代や後進の画家、家族・親類縁者、ことごとくが存命であった。春挙にまつわる会話や交遊を克明に覚えている人々が一堂に会することが可能となり、彼らが未だ鮮やかな記憶を互いに回想し合う座談会となったのである。

もし、春挙が八〇代や九〇代の高齢で没したなら。より盛大な追悼記念行事や回顧談は開催されたであろう。一方で、先輩の画家・友人はもとより、門人たちの多くもすでに物故者となつて、春挙と遠慮のない交遊を重ねた関係者が、春挙の出自や縁戚関係、寛齋門時代、独立後間もない頃、画塾や春挙邸の出来事、写生登山、蘆花浅水荘、そして近況に至るまで、様々な視点で鮮やかな記憶を蘇らせることも、故人の若い時分から逝去の直前までを、三夜に渡って語り尽くす会なども、ありえなかったであろうことは容易に想像できる。

即ち、本座談会の記録の価値は、語り手に恵まれている点にある。神崎憲一の前書きによると、「熱血多感の故人として、語れども語れども話柄は盡きず、然も語って其片影をも捉ふる事さへ出来ぬ有様ではあった」ほどの、

さながら千一夜のごとき座談会であったようで、到底全ての会話を原稿に起こすことは非現実的であったようだ。飽く迄も「全貌を窺ふ一端にもと茲に其一部の要を摘録して後考の資とする」ための抄出記録であり、「全貌」の情報量は途方もなかったであろう。

それでも、近代京都の日本画界における画家の生態、画塾というコミュニティにおける人間模様とその実態、画壇の交流をはじめ、近代の画家・文化人をとりまく様相、果ては当時の世相までが、生の声で語られており、またとない情報に溢れているのが『春拳翁追懷座談会』の史料価値といえよう。

以下、座談会の思い出語りから判明する、春拳や画塾に関する主要な事績について、いくつか触れておきたい。

### ⑬ 座談会における主な判明点

#### 春拳の転居

「座談会」の談話をたどると、春拳はたびたび転居していることが判明する。もとより春拳の自邸には住み込みの内弟子だけでなく、日常的に門人が押し掛け、画技の指導だけでなく、食事の面倒も見えており、なかば画学生寮として機能していた。さらに画塾展の直前になると、美大の制作室さながらに門人が平気で大作業を邸内で仕上げていたりするのだが、春拳の父親も同居している環境でそれをしていくゆえの、滑稽なトラブルも門人の林文塘が語っている。「お池時代に久保田竹文君が屏風か何かを描く為めに、ウンと緑青を溶いたがまだ足り相もないので、鳥渡（ちよつと）絵具屋に行つて、帰つて見ると今溶いて置いた絵具が皆無くなつて。オヤッ緑青が無くなつた、と吃驚りして捜すと先生のお父さんが、自分の土耳其帽に塗つて日向に乾かしてみられる」（10・11）。

このようなトラブルが、春拳の名声が高まるにつれ、入門する画家・画

学生も増える様々に起こり、また自邸の收容能力の限界が露呈して転居に至る、というサイクルであったことが想像できる。

ちなみに、座談会の記録によると、五度にわたつて居宅を変えている。転居を繰り返す間に、建築意匠や建材・銘木に対する目も肥え、満を持して、新築物件として構えた新居が高倉通丸太町の本邸と別邸の「蘆花浅水荘」であった。ちなみに、高倉通丸太町邸では、常に数名の塾員が、春拳邸の取次および春拳の外出先への連絡要員として、玄関部屋で起居・当直していたことが座談会から判明する。

以下、座談会にもとづく春拳の転居履歴である。

#### 《京都時代》

・木屋町通（森寛齋内弟子時代）…明治一八年（一八八五）、一三歳時。  
・熊野神社東北寄り東側（独立後）…明治二四・五年（一八九一・九二）頃、一九・二〇歳時。

・室町通二条…明治二六年（一八九三）、二二歳時。師寛齋宅の近隣。

※匡子夫人との結婚…明治二七年（一八九四）、二二歳時

・中立売（南北通名は不詳）…明治二九年（一八九六）、二四歳時か、三七年（一九〇四）頃、三三歳頃。

・御池通堺町…明治三三年（一九〇〇）頃、もしくは二八歳時か。

・高倉通丸太町（新築）…明治四二年（一九〇九）頃、三七歳時。

造営開始は四二年。四四年竣工。叔父の援助にて新築。作庭をはじめ、不釣り合いともいえる大きな岩を巧みに配置。溪谷・深淵を表現。夏には鮎を泳がせた。

#### 《膳所時代》

・蘆花浅水荘（新築）…大正六年（一九一七）、四五歳以降。

※大正三年段階で、土地は取得済であった。

蘆花浅水荘の位置づけ

蘆花浅水荘については、春挙の別邸であると基本的に認識されているが、書籍によつては、春挙の別荘と表記するものも見受けられる。その点については座談会記録において郵松雲外が披露した春挙の発言に明らかである〔41・42〕。雲外は、芭蕉が元禄三年（一六九〇）に滞在した小庵「幻住庵」（石山寺の西側、国分山に所在）を再興する計画を春挙に語つたのだが、それを聞いた春挙は「夫れはえゝ事や殊にわしもどうせ是れからは膳所の方に多く住む積りやから、君が近所に来てくれるのは大変えゝ事や」とご近所同士になる喜びを露わにしているのだ。

雲外が幻住庵再興計画を語つたのは春挙五〇代、昭和の時分であつたが、春挙はその時点で画業・生活両面における拠点を、高倉通丸太町から蘆花浅水荘に移し、本宅化への算段をしていたものと受け取れる。彼が没した昭和八年にも、新たな茶室を蘆花浅水荘に竣工させており、最後まで建築や設備の更新に余念がなかつた住まいであつた。

#### 昭和八年当時の画家コミュニティの会話・口語

本座談会は、当初から発刊を視野に入れて開催されたため、漏れなく会話が記録されていたと思われ、そのうちの主要な会話が抄出され、原稿用紙に再現されている。したがつて、昭和八年（一九三三）当時の日本画家周辺も含めた日本画家コミュニティにおける会話の様子が、言葉の端々にまで手に取るようにわかるだけでなく、どのような言葉遣いでなされていたのかも判明する。

まず、近江・京都出身の画家が方言として用いる江州弁や京言葉については、現代とは異なる言葉遣いが散見される。例えば、「そすと」などの接頭語や、「してゐられた」という言い回しの敬語などは座談会でも頻出するが、現代にはみられない言葉遣いである。

また、職業柄であると思われるが、近代の文壇やジャーナリズムの影響を感じさせる言い回し（その漢字表記）も多い。あえて難解な言い回し（表

記）を頻繁に用いる傾向は、画壇や画塾といった芸術家集団に属する文化人としての自意識が、そういった言葉遣いとなって表れているのであろう。

とりわけ、頻出するものに「恁麼」（いんも）という難読な表記がある。その用いられ方は、単に「これは」と読ませる当て字である。かつて、唐代・宋代の禅林で好んで用いられた連体詞であり、「このような」、「このよう」、「かくのごとく」と和訳されて、文壇を中心に一種の流行り言葉となつていたようである。

そして表記上の特徴としては、「鳥渡」という表記も、現代では完全に仮名の口語として扱われている副詞「ちつと」の音変化「ちよつと」であるが、座談会の記録においては「一寸」の当て字すら用いず、あえて「鳥渡」を当て字として用いているのは、美術記者神崎憲一の趣味でもあり、「無聊」とあわせて、本記録が供覧されたであろう座談会参集の人々の間では共有できる言語趣味であつたのであろう。

当時のメディアのアーカイブに、画家たちが参集して交わし合つた会話の記録がどれほど存在するのか確認できてはいないが、本史料集では、関心を払うべき言葉遣いには注を付したので別途参照されたい。

#### 春挙の写生画技の実態

春挙の写生は全て毛筆によるものであつた。したがつて、山元画塾早苗会では、春挙自身にならつて門人も、基本的には鉛筆ではなく、毛筆と墨で写生を行うことが多かった。毛筆をまるでドロイングのごとく運筆できる点、春挙や早苗会塾生の特技でもあつた。このドロイング的運筆を活かして、眼前の視界に広がる景観を切れ目なく写生するため、春挙は写生の料紙を連続で横送りできる写生ボードまで独自開発し、必携していたことがなどで語られている〔102〕。

また、門人のなかには、京都市立美術工芸学校や京都市立絵画専門学校で鉛筆スケッチに親しんで卒業したのち、早苗会に入門した者が少なくな

かったが、彼らは、運筆で写生にいそしむ春拳の姿にカルチャーショックに等しい衝撃を受けたようで、古参門人の西井敬岳は、「先生の鉛筆のスケッチは見た事がない。いつも矢立だった。矢立の写生は却々鳥渡やれぬ。難しい。然しあれでないといかぬ」〔102〕と語っている。春拳は毛筆写生の鬼であった。

敬岳の言から、春拳は写生に備えて常に、江戸時代以来の外出用の筆入れ（墨付けもできた）である矢立を携行しており、内蔵されている毛筆にて、必ずスケッチを行っていたことがわかる。また、毛筆によるスケッチが、いかに難易度の高い筆技であるのかも彼は吐露している。実際、敬岳だけでなく、写生旅行で春拳に同行した門弟が語る春拳の写生能力の高さは驚異的でさえあり、周囲の門人がそのスピーディーさについてゆけず、舌を巻いて呆気にとられる様子を何人もの弟子がありありと語っている。

例えば、画塾一行で遠征した際、同じ場所で師弟ともども写生を開始したものの、春拳と同じペースで写生を完了できた者はおらず、その場所を移動することとなり、けつきよく、春拳の写生図を写生（臨写）させてもらう弟子が続出し、本末転倒な結果に陥るといふ、当時の状況が暴露されている〔95・96・108〕。師が到達した画法や筆技を、弟子が同水準で受け継ぐことの困難さが、この座談会の語りからも明らかにされている。

#### 春拳の対人姿勢

大正四年（一九一五）、蘆花浅水荘の本屋棟が上棟すると、門人の間から庭園の湖畔に設けられた舟着きのために、舟を贈ろうという話が出た。しかし、申し出を聞いた春拳は、画塾全体のためになるプランを希望したため、伊吹山（滋賀と岐阜の県境に跨る高峰）に山室（山小屋）を建てようという話になった。そして、山岳部を画塾に新設することが若手塾生から提案されたのだが、それに対し、最古参のひとり小野青翠が、猛烈な反対を表明して、提案が流れてしまいそうになった際、春拳が示した言動が語られ

ている〔77〕。

〔小野青翠が〕昔から画家がそんな消防みたいな風して山登りなどしたの聞いた事ない。叡山など下駄穿きで登ったものだ。世間の笑い物やと言われたが、然し先生は、まあ君等先輩は若い者の此意気を愛して任しといてやれ、此企画にはわしが第一に賛成したのや。と強い態度をとられた。

一同が反論しにくい最古参門人の発言に対し、諭すように、しかし毅然と若手門人の提案を後押しした春拳の態度にこそ、塾生門人たちを惹きつけた春拳の人望が如実に表れている。春拳の人となりを象徴する言動を記録した本座談会の史料的価値を示す一例でもある。

当時の画塾においては、古参門人が新参弟子に高圧的に接する光景は珍しくなかつたのであろうが、塾生一堂の前で春拳が示した姿勢は進歩的であった。それゆえ、川畑春翠は、前掲の春拳の発言・態度を胸中に深く刻み込み、座談会で披露したのであった。

とにもかくにも春拳は、旦那ぶりも無邪気さも兼ね備え、画壇の交流ばかりか、近所づきあいまでも因習にとらわれずに接して人間味を發揮し、はなはだ記憶に残る人物であったことは、座談会の数々の語りばかりか、流派や画壇を超えた人々の回想〔注4〕からも明らかである。

#### 画業におとらぬ春拳の狂歌三昧

昭和一〇年（一九三五）、山元春拳三回忌の追悼集として、山元春拳画塾「早苗会」より『蘆花浅水』が発刊されている。これは春拳自詠の狂歌二六一首と発句六八句、その他の端歌や文章を、春拳が蘆花浅水時代に愛玩した珍竹・珍瓢製の茶道具・酒器・邦楽器類の図版とともに収録したものである。『蘆花浅水』に入集された狂歌はあくまでも書画・短冊色紙等に染筆された詠歌であって、実際に春拳が詠んだ数は、『蘆花浅水』の数をはるかに上回ることは間違いない。それは、座談会にみるエピソードからも明らかである。とりわけ、中嶋華陽と繰り返された狂歌入り戯画の寄合描きのやり取り

も痛快だが〔32〕、輪をかけて凄まじいのは、郵松雲外との狂歌勝負である。それは、使いを走らせて雲外と用件をやりとりする際、返事は狂歌を詠んでそれに代え、詰まつて返事を出さぬ方が負けとなる約束であった。「夜晝の差別なく三日許り打ッ續け」、「何でも日に二三十通位のやりとりはしたらう」というのだから、さぞかし画業もそつちのけであつたらう〔23〕。まるで狂歌の千吟興行のような連吟であり、とかく狂歌漬けの日々を過ごした二〇代半ばの春挙が語られている。そこまで彼を狂歌道楽に仕込んだのは師の森寛齋であつたことも明らかにされている〔24〕。

ちなみに、中島華陽によると、春挙の作風は蜀山人に代表される天明狂歌風でもなく、賀茂季鷹などの化政期の上方風でもなく、独自の作風であつたと語られている〔32〕。もつとも、蘆花浅水荘時代に、近所の人々相手に詠んだ作は、平明で洒落が効いたものが多い〔<sup>〔35〕</sup>〕。数々の道具類にも狂歌を染筆・絵付けして蘆花浅水荘に置いていたが、春挙にとって狂歌は終生、切つても切り離せないコミュニケーションツールであり、画業がハレなら、ケとしての重要な表現手段であつた。

注

【注1】『都市と藝術』第二巻二四〇号 山元春挙先生追悼号

故山元春挙略年譜 都市と藝術者 一九三四年

【注2】石田瑞麿『文例仏教語辞典』小学館 一九九七年

【注3】滋賀県立近代美術館編『山元春挙』二〇〇〇年

【注4】前掲『都市と藝術』では、京都画壇をはじめ、工芸作家、学者、記者ほか各界の人物や親族も含め、計六三名の追想が掲載されている。

【注5】前掲『都市と藝術』「春挙先生の狂歌」櫻井義臣

#### 《謝辞》

末筆で恐縮であるが、本史料を蘆花浅水荘園の蔵から発掘され、本館による翻刻についてご快諾いただいた記恩寺（蘆花浅水荘）代表役員の山元寛昭氏に深く感謝を申し上げます。同様に、二〇二一年当時、企画展「蘆花浅水荘と山元春挙画塾」の準備中に座談会記録をご教示くださり、展示への出品につなげていただいた松竹京子氏（春挙門小早川秋聲の研究者・収集家）にも深甚の謝意を表したい。他の資料も種々ご教示いただき、出品もいただいて充実した展示や図録となった。

なお、校正及び注の確認では、山口真有香氏（滋賀県立美術館）にもご協力いただいた。併せて感謝申し上げます。

## 二、春拳翁追懷座談会解読文

(バインダー表紙に旧表紙切抜を貼紙)

「第一」(ボールペン)

「追慕座談会」(墨書)

「昭和八年八月頃 神崎憲一氏筆記」(マジックインキ)

### 春拳先生追懷座談会<sup>[1]</sup>

春拳先生を追憶しやうと其陰中<sup>[注1]</sup>靈前に會し、或時は旧友旧知の人達の一團が語り更かし、或る夜は門人弟子の一群が寄り合ったが、一生涯六十餘年の星霜を畫事に於ては多端、趣味に於ては多岐、且は性情熱血多感の性情の故人として、語れども語れども話柄は盡きず、然も語つて其片影をも捉ふる事さへ出来ぬ有様ではあつたが、□□□々の全貌を窺ふ一端にもと茲に其一部の要を摘録して後考の資とする事とした。(神崎憲一誌)

### 第十夜(いろは順)<sup>[注2]</sup>

徳力幽雪 草島医学博士

神阪雪佳 田中主治医

田中亀太郎 中島華鳳

村松雲外<sup>[注3]</sup>

匡子未亡人 嗣子清秀氏

川村曼舟 林文塘

### 両師匠と巖父<sup>[3]</sup>

徳力<sup>[初]</sup>先生が寛齋翁の玄関を出入られてから初めて持たれた家は、熊野神社の東北寄りの東側の處だつた。其後暫くして室町に移られた。明治廿四五年頃と思ふ。

田中亀<sup>[初]</sup>そこで奥さんが来られたのです

村松<sup>[初]</sup>二階から熊野神社の境内の雪の積んだ松を寫してゐられたのを覚えてる。

徳力<sup>[初]</sup>熊野神社には一年とゐられなかつた様だ。先生は寛齋翁が木屋町にゐられた頃野村文挙さん<sup>[注4]</sup>から入門して来られたのですな

〔欄外に「角倉やしきの路?」(ボールペン字)〕

村松<sup>[初]</sup>何でも文挙さんに連れられて寛齋翁のところに入門しられたと云ふ事だ。春拳と云ふ號は寛文挙さんにつけて貰つたのやと御本人から聞いた事がある。寛齋翁に入門された時かてのは、文挙さんが華族の学校の先生になつて東京に行かれる時、寛齋翁に預けられたので、やそつです。入改めて入門したと云ふ様な事もなく愚頭々々某俤になつたのだと云ふ事だつた。

××<sup>[匡子]</sup>文挙翁とは御親戚だと云ふ事でしたがどんな御関係なのです

未亡人<sup>[匡子]</sup>野村さんのお家は主人の父の里方、高田善右衛門の廻縁になるやのです。

村松<sup>[初]</sup>文挙さんは神崎郡北五箇庄村字宮荘の人で春拳さんのお父さ

んが家もその出なのだ。お父さんは山元善三郎と言はれた。先生は子供の時から絵が好きだった。

○徳力―第三回内国勸業博覧会に先生春挙さんは二尺五寸巾に『菊慈童』を出品された。私は春挙さんと一緒に東京迄見に行ったが、其時春挙さんは野村さんの家に泊まられた。

村松―春挙さんの畫風を見ると寫真をやりかけてから著るしく變つて來てる。寫真をやったと云ふ事が春挙さんの絵の上に非常な關係があると思ふ。其絵には餘程寫真めいたところがある。

### 写生の部

田中龜―丸榊〔注4〕から頼まれて鷺を描かんならん事になったが、其頃京都に鷺を飼つてる処などないので弱られた事がある。だんふ聞合せて見ると神戸の楠公〔注5〕さんには居ると云ふ事なので、私も一緒にいった。そすと鷺が凝ツとしてよつてちよつとも動いてくれぬので、彼〔注6〕奴を一遍怒らせて見たいから洋傘で突けと言はれる。

そんな事をしたら番人に叱られると言ふと、叱られるのは当り前や、と自分で突つついた。案の定鷺が吃驚りして怒り立った。夫れを大急ぎで寫生された。勿論番人に叱られた。

村松―山元と云ふ姓は栗田郡〔注6〕あたりから出て來たのですか？

未亡人―先祖が代々山〔注7〕の桐生の山〔注7〕のふもとに住んでゐたので山元と〔注8〕威名乗つたと云ふ事で、其以前は的〔注8〕(いくば)と言つてゐたと聞いてゐます。

田中龜―寛齋翁の『桃太郎』の図があつて、名古屋あたりの御得意か

ら夫れと同じ絵を春挙さんに描いて貰つてくれと頼まれ、私が頼みに行つたのだが、どうしてもいややと言つて描かれぬ。それを何でも描いて欲しいと言つて到頭三年目に描いて貰つた事がある。

村松―先生のお父さんの善三郎と云ふ人は善右衛門と云ふ人の弟で……

未亡人―初め生駒と言つてゐられたのを勝手に山元と言ふ名にかへ、終ひには山元生駒と二つ續けて名前の様にしてゐられた。

村松―八日市の傍に瓦屋寺村と云ふ村がある。そこには同じ名の山と寺があるが、善三郎さんはその山寺に幾つ位の事か暫く行つてゐられて禪をやられた事がある。氣風が大分常人とは變つたとこのある謂はゞ奇人と云ふ側の人だった。二休と云ふ號をつけてゐられた。碁がうまくて田舎初段位打たれた様だ。

川村―御自分の方に都合が悪くなるとすぐ掻き廻はされたと云ふ事〔注10〕があつた。

村松―初め一回なら初段にも勝てる、と言つてゐられた。二回目からは手を見られて負けるのだ相だ。

林―奇人らしい一例だが、お池時代に久保田竹文君が屏風か何かを描く為めに、ウンと緑青を溶いた鳥渡がまだ足り相もないので、鳥渡繪具屋に行つて歸つて見ると今溶いて置いた繪具が皆無くなつてゐる。オヤツ緑青が無くなつた、と吃驚りして搜すと先生のお父さんが、自分の土耳其帽に塗つて日向に乾かしてゐられる。そして御本人は平氣な顔してゐられるので挨拶のしやうがなかつたと云ふ事だ。

徳力―洋服着て高下駄穿いてゐられたのを覚えとる。

村松―その腰に團扇を差してゐられたのだから、何処やらで子供から  
狂人や言はれた事があつた相な。

未亡人―立烏帽子をかぶつてゐられた事もありません。<sup>[12]</sup>

神坂―雨か雪の時には赤毛布を被つて歩かれる。

田中亀―赤毛布をかぶる位なら其頃皆平気でやつてゐる。<sup>[注6]</sup>

川村―村松式の髯がありましたな。

村松―私の父とその先生のお父さんと懇意でしたな。

未亡人―主人の父の父に当る人は小学校の教科書に出てる高田善右衛  
門で奇才もあつた人だと云ふ事です。<sup>[13]</sup>

村松―江州商人の典型としてゝすな。……先生が寛齋翁に預けられて

間も無い頃注9の事やと思ふが、先生が『鶏頭』を寫生されて夫れを寛  
齋翁に見せると、非常に褒められて翁は来る人毎に夫れを見せては、

此坊んが是れ丈け寫しましたと自慢してゐられた、と先生のお父さ  
んから聞いた事があつた。

田中亀―寛齋翁注10は晩年、春拳はわしよりえらい者に成りよると言は  
れたと聞いている

神坂―兎に角寛齋翁のお気に入りだつたらしく、時々玄関に行つてた  
時奥から春拳々々と呼んでゐられたのを聞いたものだ。

田中亀―寛齋翁の病中も看護婦以上によく世話されたと云ふ事や

### 結婚祝の假装

神坂―室町二條に注11轉ぜられた当座注10の事だが、其時はお父さんと二人  
で雇婆さんを使つてゐられたが、書生が沢山来て飯を喰ひ、神中

は朝から詰め掛けてゐた。

村松―そこに奥さんが来られたのだが、あの時の神坂君達友人のお祝  
物が奮つてた。熨斗が三間もある様な夫れに掛けた水引が釣瓶繩で、

中身は縮緬雑魚の中から捜し出した小さな鯛が一尾、酒は注12空樽の  
中に小瓶を入れたのだった。

神坂―そう、山元君が奥さんを貰つた相注13なから一つ奥さんを笑は

したるやないかと云ふので、十人許りで相談して三日掛りで其準備  
をしたものだ。草野龍雲、一見連城、田中月注14香耕、藤井玉洲、夫れ

に私も入り版刷りの源助など十人許りだった。夫れが赤い袴を着て  
友白髪注15のぼて假髪を被らうと云ふ趣好なのだが、夫れが却々揃はぬ

のを無理耶理して捜し出し、衣装をつけると内輪で笑ひ出して仕様  
がない。内輪で注16笑つたらあかぬと云ふので三日間の準備、二三日衣装

をつけてゐやると目録を作つたりしてゐる間注17夫れも其姿である内に、妙  
なものでそう可笑しくもなくなつた。

未亡人―何しろ表の間が五畳、中の間が二畳、奥が六畳、夫れ丈け  
の廣さなので十人からの人が一度に来られたのでは入る処がない始  
末で……

村松―夫れを承知で、困らせ様と云ふのが先方の腹ですからなア。私

は其時は此方側だったが、頼まうツと勿論隣り近所にも筒抜けの有  
りぎりの大きな声があるので、私が取次に出ると真ッ先に居るのが草野龍

雲で、見ると其今の様な異様な一群で真ッ先に居る人の髻注18だに大きな瘤  
を造り付けてある。見ると夫れが草野だ。何とも文句を言はずに

其注19瘤のある顔をムググやつてよる。笑はせ様の手に相違ないし

笑つたら此方が負けになるのやと、鳥渡失禮と便所に立つ様な風して避け後を<sup>賣</sup>與服屋の竹中に代らして気を替えた。

神坂―初め村松君が出て来よつたが一目見るなり引込んで暫く誰も出て来なんだ。

村松―何しろそんな事何も聞いてゐなんだのやから全くの不意討やつた。神坂君の頭などは白髪(19)の鬘が二尺も前に突出して居て、手が地につき相な短い二尺許りの杖をついて、まるで倒さまになつて来たはるし：

神坂―座敷に通されたはえゝが、奥さんがちよつとも笑はぬので困つてしまつて、田中月耕が懐中から眼鏡を出して奥さんの顔を覗きに行つたもんや。其頃のゑかきて<sup>■</sup>暢気なものやつた。夫れでも道の眞仲をそんな風で歩くもせんで、家の前迄行つて衣装をつけた。村松―何やら家の前でガサ／＼音がすると思つた<sup>(20)</sup>や。そすと今の頼まうと云ふ聲や。春拳さんは布海苔の袴で皆を迎へ、其お客さん達に出すお菓子が蠶豆三粒宛。

××―先生と奥さんは御親戚と云ふ事でしたが：

### 青年時代の倅

未亡人―私<sup>達</sup>の里のお祖父さんが<sup>が</sup>の兄弟が分家して<sup>た</sup>のかこの山元家で<sup>が</sup>両方<sup>が</sup>孫同士の再従兄弟に成ります。

村松―奥さんが来られた前後は私等は自分の家より先生の家に餘計のたかも知れぬ。朝迄話し込んだの知らずに、新聞配達(21)のベルの音を蕎麦屋と間違へたりした事がある。

村夫 未亡人―あの頃と云ふと晝も夜もへたり込んだはりましたしなア

村松―春拳君も亦よく遊びに出よつたが、居ても留守でも構はずに上り込むのやし：

未亡人―正月三日丈けは留守にしとかうと云ふので二階で寝込んでると、そこに村松さんやら三人連れが上り込まはって酒盛が初まり、晩迄(22)になつても却々動かはらぬ。その内<sup>■</sup>に二階の主人は便通が催して来ても今更降りる訳に行かぬ。然しどうにも堪らぬと降りて行く(22)と、よう一杯飲め、矢ツ張り居よつたんか、と云つた調子でどちらが主人やら分らへんと云ふ始末で：

村松―何しろ其頃の春拳君の家は暢気やつた。お咲婆さんと云ふ婆やさんがゐて、春拳<sup>さん</sup>君が居やうが居まいが上り込んで一杯つけさせたものだ。そして帰つて来ると、おう今帰つたか、まあ一杯、と云つた始末だつた。一日に一升やらぬ日は<sup>無</sup>なかつたらう。

神坂―私なども殆んど毎日行つてゐたが奥さんが見えてからは餘り行かなくなつた。

未亡人―餘り御遠慮深い方でも：

村松―その頃狂歌でやりあつた事がある。それは使ひが来ると其返事を狂歌でやるので、夜晝の差別なく三日許り打ッ續けたが、詰つて返事を出さぬ方が負けとなる約束なのだから、歌が出来ないと繪に手傳はせもして、何でも日に三三三通通位のやりとりはしたらうた。<sup>(23)</sup>今でも双方に其やりとりしたものが残つてる筈だ。一度清書しとこ(23)うと云ふ事にな話しあつた事もあつたが其俣になつてる。

未亡人―その頃は高山春陵と西井敬岳とが玄関<sup>■</sup>に(24)ゐられましたが、

夜でも夜中でもお構ひなしなので、寝てるのを起される。高山はすぐに目を覚まして飛出して行くので、いつも高山が使ひに行った。

村松―狂歌に話ると悪口の言ひあひをするのだが、春挙君は仲々狂歌がうまかった。春挙君の狂歌は寛齋翁の狂歌を習ったのだ。

川村―雪や紺、霰や紺の前垂に、受けてたはれし昔恋しき―と云ふ寛齋翁の狂歌を聞いた事がある。何とやらして、朝顔の上戸にて、今朝も咲けく、明日も咲けく、と云ふのもあった。

田中亀―奥谷秋石さんは寛齋翁の塾には此処の先生より遅く入られたのですか

徳力―一年かそこいら遅いでせう。夫れに暫くして東京に行かれて三四年居られた様だ。室町時代に帰へられた。

田中亀―皆が恵比須さんくとと綽名してゐた  
神坂―室町の二階でしたなア。

村松―チャンく坊主々々と小供子から石投げられたりした事がある。寛齋翁の留守に何処からか蛇の脱皮ヌイを捕って来て、夫れに砂を一杯

詰めて押入の中に垂らして置いて、春挙君が雄山さんに蛇や々々押入に蛇が居よる、と言ふと雄山が棒持つて行って突ツ付いたので沙②が出て来て大笑ひした事もある。

徳力―木屋町時代に雪が降った夜裏の川原にいろんな物を持出して忠臣蔵の夜討やと騒いでゐて叱られた事もある。

神坂―春挙さんは若い内頃は大大議論家だった。二十四年の絵画青年會の時など、いろんな事があつて何回も何回も寄合つたが、春挙君さんは其頃から論客だった。

徳力―如雲社時代には毎月寄合があつて、寛齋翁も毎月出品してゐら

れたが、其時亀屋良則の先々代の眞平と云ふ人が、雄山と春挙さんに半折を描かせ、其上に自分で歌を書いて自分の名で出品してゐた。(28) そんな物が八木さん所に搜したら残つてるかも知れない。

私が持つてる春挙さんの絵の一番古いものは室町時代ので、総領息子が出来た時大將人形を描いとくれやすと頼んで、徳川家康を描いて貰つた。

#### 書畫寄書競争

中島―私は耳が遠いので皆さんの話が薩張り聞こえないのは残念だ。それで私は私丈けの話をさして貰ふ事にする。私は春挙さんとは十八の年からの馴染みで、しよつちゅう呼び(29)に見えては遊びに來た。去年の冬も一緒に狂歌と絵の寄せ書をやつた。そんな事は膳所でもやつたし木屋町でもやつたしいろいろあるので、何處でどんなのが出来たか、今覚えてはゐぬ。

此七月になつてからだつたが、病気で臥たはると聞いて朝見舞ひに來たが、玄関で断はられて會へなんだのは残念だった。処後數がその日して訃報に接した。翌朝七時頃書生が飛んで来て大変な事になった、と云ふ報知で、オゝそんなに悪かつたのかと、あの時會へたらよかつたがなアと今更ながら吃驚(30)した残念な事だった。

昔から私達二人寄ると遅くなつて、茶の間で二人で寝ると云ふ始末だった。二人で寄せ書をする事になるといつも春挙さんは、君繪描けわしは書を注かく、と言つて私の席上(注)が早いと言つては、一躰春

春さんと云ふ人は負け惜しみの強い人で、私の繪に負けずに狂歌を作つては書いたりした。いつだったか膳所で一緒になった時、今日は満月や、と縁に卓〔31〕を持出して、私が何か描いたのに春拳さんが『名月や山も思はず海も見ず』と詠まれた事がある。いつだったか私に大津繪を描かせて春拳さんは狂歌を書いて、夫れで一巻出来たらもう一巻書掛けと言はれるので、わしは大津繪みたいなもの大嫌ひや、と言ひながら兎に角描くには描いたが、其次行くと夫れが立派な巻物になつてるので吃驚りした事がある。狸ときつねのものもある筈や。或る時など私が

「春拳さんあんたの書かはる狂歌を見ると、蜀山人〔注13〕でもなし季鷹でもなし、そすとあんた自分でやらはるのやなア」

と感心して言つた事があつた。そすと春拳さんが、そすれでは今日「名月三秀」と云ふ題でやらうと言はれるので私は早速、頭芋の側に小芋を二つ三つと栗と莢豆とを描いた。それを見て暫くすると春拳さんは其繪の上に

親頭無病息災子も孫も

くりく／＼肥えて豆で暮しつ

とやられた。私は夫れを大変面白いと思つて、此繪と狂歌に困んで菓子を作らせ、小芋には餡を入れて懐中善哉としたりした。その菓子が漸く出来て来たのだが、今はその当の相手の春拳さんがゐられなくなつてゐる。存命中に夫れと一緒に喰ひたかつた。

村松―春拳さんは先亡〔34〕くなられる前の月の廿六日の晩に私の家に來られた。極く元気だったが、私がどうも二階に上つたりする時しんど

いと言ふと、年やで皆そうや、わしも此頃眩暈めまいがして困ると言つてゐられた。其晩は久し振りやしと私がどうしてゐるかと思ひに來られたのだったが、其歸へり道に眩暈で卒倒つひられたのが病みつきで、夫れからもう起てなかつたのだ相だ。

其時もいろ／＼話が出たが、春拳さんは私より後迄残る積りの〔35〕文句話があり、私も又その積りでゐた。密葬の日、奥谷君と會つたが、奥谷君も春拳君より先やと思つてたのになア、と云ふ話が出たりした。もう一つ前にこんな話がある。四五月頃、私が先祖の墓を失つてしまつて、是れではならぬからどうぞして捜し出したいと思ひ、春拳君〔36〕は顔が廣いから此人に頼んだら捜せるかと、わし墓をやらうと思ふと言ひ出すと春拳君は皆迄聞かず、親友は捨てとかせぬ哩、とまるで私の死後自分で墓位建てたる、と言はぬばかりの口吻だつた。是れなど明に、春拳さんは私より後迄残る積りだつた證據だ。

### 旅中徒然の興

革島―私が春拳さんと知り合ひになつたのは明治二十九年〔注13〕で中立賣時代で、夫れは奥さんの御病氣が仲介だつた。夫れからよく山登りに一緒にお伴した。

林―白骨温泉に行つた時雨籠りの時〔37〕して障子をめくつて寄せ書したりした事がありましたなア。

革島―あの時は三日間降り込められて、無聊〔38〕で仕様がなないので餘興に芝居をやる事になり、ポスターを描くやら顔を扮装つゝするやら大騒ぎでしたなア。

林―大八木桂月君が黒ン坊を畫描いたのに私が文句を書いたのですが、記念の爲めにとめくって持って歸へりました。傍に「但位の高い人の餘興だから敬意を表して見に来い」と書込んであります。

革島―そんな戯れ描きに使ってしまったって、折角寫生しやうと思ふ時には絵具が無くなってしまうたりしましたね。

<sup>(38)</sup>未亡人―まだ山岳会など出来ない昔の話■と思ひますが、中森といふ学校の校長さんと写生に、二人で能登に行った時宿屋の女中を驚かしてやる■す積りで、幽霊の絵を描いて梯子段を上った白壁に貼付けて置いた処が、その女中さんは一向に上つて来ないので突然ドタンノノと大きな音がしたので皆で駈付けると、丁度其宿に泊り合せてゐた他所の娘さんが、夜中に小用に立たれて廊下の薄ぼんやりした処で此絵を見られ■、吃驚して卒倒された■そうでの■だ■った相だ。<sup>(39)</sup>其親達ちに変怒られ閉口したとの笑咄しも残つて居ります全し時、暑い真盛りの事とて寫生に山に登りすあります時、山の上で喰べる積りで西■瓜を中森さんと坊主持ちで持つて行つたが、山の中に坊主にほど會ふ事がなく、とても重もくてく■到頭■峠で岩にふちつけ割つて喰べた、と云ふ話なども此頃■の事かと思ふ。時の事です。あります

田中医―先生が高倉に来られた当座の事だ。門人を連れられて片墜田へ寫生に行かれた処が、其日は波が高くして棧橋から上陸する事が困難だったので、何處でもえ■し上れる處から上ろうと云ふので、或る家の裏に上つた。<sup>(40)</sup>そこは古吉と云ふ古着屋だったが、勿論先生と知る筈もなかつたけれど、困つたはるのやしと親切に宿屋の周旋を

したりなどして上げた。夫れで先生は式紙を描いて、落■疑■なしの印丈けでお禮■やと言つてあげられた。その家の女子衆も一枚貰つたが、こんな物あんたに上げるわ、と下男にくれてやつた。その下男が私の家に来て、恁■麼■絵■いくらかに賣れますやろか、と云ふので是れ々々なら買つてやろう、と少し高い目の値をつけてやると、其下男は吃驚りしてしまつて、滅多に賣れぬと云ふ氣になり持つて歸つてしまつた。何でも其時も先生は、誰か一行の一人を先生にして自分は門人の一人になり濟してゐられて、其式紙も門人に成つてゐられた先生が上げられたので、鳥渡疑つたものらしかった。

村松―兎に角華やかな人、義侠に富み情に脆いと云ふ風の人だった。私が石山国分寺の幻住庵を再興する事になつて相談に行くと、夫れはえ■事や殊にわしもどうせ是れからは膳所■の方■に多く住む積りやから、君が近所に来てくれるのは大変え■事や。と大賛成され、其後會ふ毎に其経過を聞いてくれ、現に最後に見舞つてくれた時なども、どうしてるかと催促されたりした程だった。

革島―先生が門人と其位置をかへて旅行される事はよくあつた。一度黒部に行った時にはこんな事があつた。大阪に本社のある水力電気の人に■大阪本社から電報が行つて山元さんが行くから歓迎しろ、とあつたのでステーション■には出迎人が■あつたが、其時の旅行はどうした訳だったのか一行が駅についた時から自然に間違ひが出来てしまつた。夫れは誰も紹介も何もしないのに出迎人が私を先生と思込んで、ツカ■くと私の處に来て挨拶をしたりする。先生も目で會■図■をしたりするので、私■は其個先生に成り濟まして威張つてやつ

た。宿屋に行くとは今度は宿の主人も間違つてしまふ。然し其處ではすぐにばれて笑つてしまつたが、夫れから鐘釣温泉に行くとは、先生が丁度大阪毎日の日本八景の審査委員になつてゐられたものだから、土地の保勝会の人達や何かゞ羽織袴で宿に挨拶に来る。夫れが皆先生と私を間違へてしまつてる。勿論宿屋の女子衆も主人も皆間違つてるのだから仕様がな。私は中原甕塘君に黙つてろ々々々と、不相変先生に成り濟まして威張つてやつた。ところがそろ／＼扇面や式紙を持込んで、どうぞ一筆と来た。よし／＼置いとけ々々々と頷いて置いて、皆が寫生に行つた留守に『枯木寒鴉図』を描きながらやつた。処がその鴉がどうも鴉に見えなくて鳩に見えてならぬ。それで中原君にそう言つて補筆して貰つて、漸く鴉に見える様にした。そこで落款だが、春挙と云ふ字が、最近では非常に分り易くなつたが、其以前には一頃一寸癖があつた事がある。其頃の落款疑(款)に似せて春彦と書き、朱で印を書いた。其俣歸つて来たが、先生は平気な顔で、寧ろ面白ろ可笑しく見物してゐられると云ふ風だつた。其後上高地に行つた時にも、土地の人達の間、先生みたいなのがたんとゐて困るなアと噂された事があつた。朝日新聞の葛西白楊、毎日新聞の井上洛山人なんと云ふ人達が一緒に、葛西君は殊に風采のいゝ人だつた。

### 義兄弟の三人

田中亀―私は或は此處にゐられる皆様方よりもの内、春挙先生とは一番古い昔馴染みかと思ひます。夫れは青木松次郎と先生と私との三

人が、青木は清水半兵衛の小僧、私は矢代仁兵衛(47)の小僧、先生は森寛齋の小僧書生、と云ふ訳で同じ町内でよく顔を知り合つてゐましたが、御主人筋同志の往来がありますからですが、其頃は三軒が三軒共皆潰れ掛けてゐて、謂はゞ三貧乏でした。尤も私と青木とは初め兄弟分の盃をしてゐました。共々家を起さんならぬ身分やと云ふので、明治十七年私の十七の年、八新の盛んな頃そこで盃しました。先生が二人の仲間に入られたのは先生の二十歳頃かと思ふから、四五年後になる。私は其頃金を借りて借りたくつて、皆から金の幽霊と言はれたりした程で、金を借りる事に掛つてゐた。

林―夫れが三人共頭大成された訳ですなア。

田中亀―高倉の家もの普請が出来て披露されると云ふので、私も手傳ひがてら出掛けて来た。そすともうだん／＼時間が迫つて来るのに、先生は玄関に掛けるの短冊を描くのやと言つて奥に入つてゐられる。それで私が出掛けて行つて、何してはるのやと訊くと、でんでん虫を一匹描き度いのやけど、どうも思ふ様に出来ぬで弱つて、と言ひながら頻りに描いては潰し／＼してはる。大分描き潰しの式紙短冊がそこに置いてある。皆でんでん虫がたった一匹描いてあるだけだ。ちつとも變つた事のないでんでん虫で、何で夫れがよくないのか一向に合點が行かないので、そう言つて訊くと、今日は此家の普請の披露の訳やが、実はわしはまだ家の普請の披露などする程(50)の身分とは違ふ。やつとほんの少し頭を擡げた丈けの事や。夫れでほんのちよつと頭を擡げたでんでん虫が描き度いのやけど、どうしても擡げ過ぎたり引込み過ぎたりして、思ふ様にならぬで弱つて

る。と言はれて、やっとしてからもう時間も来たしまあ是れ位にして置かうか、と一枚の短冊を持って立上られた。あとには三十枚程の短冊が描き捨て、あった。私には其最後の一枚が何でそんなによく出来てるのか、他の三十枚が何で悪いのか、そんな事は長い間先生とつきあつて絵の話も聞いてはゐながら、薩張り分かりませぬ。私は丁度今年六七十八九才、三人の内の年長二番で先生が一番お若かった。

今度の青木が死んだ時にも先生と二人で葬式をしてやりましたが、<sup>今度は</sup>到頭私一人残されてしまひました。今度の御病氣も私は何も知らなかつた処が、萬当「カ」でお神さんに聞かされて吃驚りし、一躰いつ頃からの事や、<sup>そんな</sup>誰が■行つても面会謝絶される程そんなにお悪いのか、と矢継早やに質問した事だつた。屹度それは他からの人に会つたりしては悪い病氣なのに違ひない。夫れを無理に行つたら却つて病氣の爲めにいかぬ、と思つて凝ツと辛棒して輕うなられるのを待つてゐたのが、不意に恁麼事になつてしまつて、何とも言ひ様の無い辛い氣がしてる。

今度の病氣に成られる前から、昔馴染の婆さん藝者などに、私達三人の兄弟分の話などしられて、早く死んだ人の葬式を残つた人が<sup>53</sup>してやる事になつてるのだ、などと話したりしてゐられた様だ。村松―私の家に來られた時にも、別段用がある訳ではないが、逢ひ度うなつたので來たと言つとられた。

未亡人―そうでした。あの日は晝の間彼方此方廻つて歸つて來られて、今日は村松さんの處にも行き度かつたが、晩の御飯を濟ましてから

行つた方が悠つくりしてえゝし歸つて來た。と言つて晩の御飯の後で出掛けられたのでした。<sup>54</sup>後で聞いた事ですが、あの日には出入の植木屋に<sup>ま</sup>迫行つてゐられました。

田中龜―そして何ともなしに言つてゐられる事で、夫れで暇乞になつたの<sup>や</sup>どすなア

林―私も御容子を伺ひに來て玄闔で奥さんとお話していると、奥から呼ばれるので奥さんが行かれると、私に会ふし入れと言へと云ふ事で御病室に行くと、いろく御病氣のお話などあつた中に一つ二つ<sup>55</sup>はやな事を言はれたりしました。夫れは、わしは生きてる間にしとき度い事が四つある。畫集を作る事、畫論集を纏める事、スケツチ<sup>を</sup>集を作る事、狂歌集を作る事、此四つ丈けは是非しとき度い、と言はれるので私は、<sup>是非</sup>先生早う直<sup>治</sup>られて是非やつて欲しうおすなアと申上げた事でしたが、何だか夫れが其時何とも言へず妙に聞こえしました。

#### 屏風畫会其他

田中龜―十四五年以前に觀音百幅會の話があつたが、到頭出來ず仕舞ひだつた。屏風は先生のやられた畫会の内での一番最後で、<sup>56</sup>五双位は出來たと思ふ。

未亡人―夫れはお池時代で、鳥の子の六曲屏風でした。

田中龜―その時先生から相談を受けたので私が、そんな大けな物やれますかと駄目を押すと、どうしてもやると言はれるので、そんなら引受ける人を作つて來ます、と言つて何人か作つた。屏風共百五十

圓で確か先生のお禮が百圓やったと思ふ。

川村―私は一度其お使ひにやられて百圓家に来た翌年位の事かと存じます。上田萬次郎さんが幹事をしてゐられて、あの人がゐられたら何も彼もよく知ってゐられるのですが、昨年亡くなられてもう詳しく知った人がゐられなくなってしまいました。四枚の内一人枚は半井さんにありもう一枚は北垣さんに行つたかと思ひます。月掛け一圓五十錢夫れが一年で十八圓になり、夫れで三圓経費に使ひ抽籤で一点誰かの作品が当る訳です。

徳力―その頃の潤筆料は皆そんなもの貰つて来た事があるが、えらいもんやなアと感心した事だつた。<sup>(58)</sup>

先生未亡人―夫れは主人の卅二歳の頃、明治卅四五年頃でしたかなア。川村―海岸の『薔薇』がありましたなア。未亡人―『馬』もありました。

田中亀―夫れは以前の時のと違ひますか。未亡人―養素會は菊池さん竹内さん谷口さんに主人の四人の二尺五寸中を四枚宛、都合皆で十六点を会員に分ける会として、確か私が此(59)でした。私は人から頼まれて寛齋翁に二圓五十錢持つて行つて尺五を描いて頂いた。

村松―寛齋翁が死なれる鳥渡前の事だが、他から頼まれて尺三幅対を絹持の三十圓でやつて貰つた。

神坂―良則がよく五十錢札をグル／＼と巻いて持つて行つては、寛齋翁に半折を頼んでゐたのを覚えてる。

田中亀―寛齋翁に二十圓で尺五の双福を頼みに行つた事があるが、

そんな時二尺升樽附きだつた。<sup>(60)</sup>米屋が月末に催促に行つても金が無い。是れでも持つていんだらどうやと半折を出しても、そんな物と言つて持つて帰へらなんだ。

村松―四條高倉に道具屋があつて、寛齋翁がよく絵を持つて行つては金を借りられた。長持一杯寛齋翁の絵で詰つた。其頃の相場が半折五十錢、聯落八十錢と云ふ事だつた。或時など寛齋翁が屏風を持込まれて五圓借せと言はれたが、其頃寛齋翁の屏風など持つてても手にをへぬし、繪はいらぬし持つていんどくれやす。お金は何とかお立替しまへふと借した事があつたと云う話だ。少し高くなつたと云ふ噂が立つと大急ぎで長持の中のを皆賣飛ばしてしまつた。

田中亀―東京私等が東京に行く時店のお得意にお菓子代りに栖鳳や六兵衛善五郎の花瓶など持つて行つたものだが、栖鳳には五円で尺五が描いて貰へたし、善五郎の仁清寫しの徳利が七十錢だつた。森市と云ふ質屋があつて、(66)そこからよく栖鳳の絵を私の店に持つて来た。栖鳳さんの塾の運動会の費用にされるのやと言つて、或時など半折が三十枚も塊まつて持込まれた事がある。一圓五十錢二圓出すと其内から選り取りが出来、三圓出すと大分大きなもの(67)が貰へた。私の店では其頃そんな物を皆お使ひ物に買込んだ。いゝ物からお使ひ物にした。今でも何幅が残つてるが、夫れは皆お使ひ物にした残りだ。森市は皆私の店に持つて来た。

徳力―木屋町時代の寛齋翁など随分貧乏で、お禮の金は玄關の机の抽出入れてあつて、月末に掛取りに来た人が其中から欲しい丈け持つて歸へる事になつてゐたが、大抵ははいつてなかつたと云ふ事だ。

神坂―寛齋翁がよく言つて居られた、わしは恁ふやつて絵を描いてるが、書生が皆喰つてしまふのや、と。

徳力―台所には夫れでも大抵樽が据えてあつた。時々そつと酒を盗みに行つたものだ

田中亀<sup>(68)</sup>―中島有章がよく手傳に来てゐたが、実は酒飲みに来てゐたのだ。

### 病氣に神経質

田中医―先生の御尊父が始終言ふてゐられた、春挙は幼い時から躰が弱かつたが繪が好きで、かなり描いたので他の商賣させるより絵師にしたがよからう、と云ふので繪師にしたのだ、と。私が診る様になつてから、どこがどうと云ふて別に悪い処もなかつたが、総躰に虚弱な方<sup>(69)</sup>ではあつた。幾歳位からだつたか腹に悪い物が出来て、医者の方から言ふと餘り感心しないものなので、困つたなアはびこると悪いがと案じてゐた。別に痛くもないし、時にはほつといつても癒る事もあるものなのだが、風邪引かれたり腸を悪くされたりした時、そんな薬と一緒に投薬してゐた。それがいつの頃にか無くなつた、四十位になられてから大分肥えて来られ、夫れと同時にいつともなく無くなつてしまつた。腹をさぐつてもちつともさはらない様になつた。奇談と云ふ程でもないが、先生はよく始終<sup>(70)</sup>どうも悪い事をしてるのでと何處か具合の悪い処があるとそう言はれた。何を悪い事されたか知らぬが丁度何かよくない事をした人が巡查を見ると怖ろしがら<sup>(71)</sup>様に、先生も医者<sup>(72)</sup>の顔を見ると恐ろしがられた様だ。花柳病<sup>(73)</sup>でもあ

りはしないかと心配してゐられた様だが、それは無かつた。何度となく血液検査もやつたが、いつもそんな事は無かつた。神経だ。

徳力―若い頃から神経家だつた。雄山がよく顔を見ると、山元君今日は顔色が悪いえと言ふと先生はすぐに、そうかと言つて薬を飲まれる。そすと雄山がすぐあとから、又一杯掛けたつたと喜んだものだ。何處か鳥渡でもよくない處があると、肺炎やないかしら、胃癌や無いかしら、窒扶斯<sup>(74)</sup>や無いかしらと心配してゐられた。

田中医―近頃は素人が皆そうではある。

田中亀―然し先生は病氣事となると神経持ちやつた。

村松―いつだつたか奥谷君の出所に一緒に<sup>(75)</sup>行つた事があつた。確か箕面やつたと思ふが、へトくく<sup>(76)</sup>に酔ふて<sup>(77)</sup>食ふた物をドツとあげられた。そすとそのあげたものが眞紅になつてるので、さあ肺病やと大騒ぎした事があつたが、なあんのはれは宝丹だつた。先生はいつから始終<sup>(78)</sup>宝丹を嘗めてゐられた。

田中亀―そうどすく<sup>(79)</sup>いつも宝丹を嘗めたはりました。若い頃えらい宝丹が流行つた事があつて、人中に出て宝丹を持つてんと気が引けた程だつた。それから後もずつと先生は宝丹<sup>(80)</sup>をのんでゐられました。三宅―宝丹は近頃でも飲んでゐられましたなア。未亡人―そうどす亡くなりなます迄のんでゐました

革島―それと下剤の丸薬は山登りなどされる時には屹度持つてゐられましたなア

田中医―煙草をやめられてから代りに尚宝丹を常用されたのでせう。胃散<sup>(81)</sup>過多で其方の薬も絶や<sup>(82)</sup>された事がありませんでした。一度禁<sup>(83)</sup>

止廣告をされた事がありましたなア

村松へえく、若い頃から何度となくされましたよ。よく今度のは何回目やとひやかしたものです。

革島―廣告はどうかしらぬが、よく禁酒の繪を描いてゐられた。

中島―兎に角春拳君は若手やったが却々感心な人やった。大礼服着る様になれた人など繪かきの内に餘りたんとは無い。年から言つても慾を言へばきりが無いが、應擧と同じ年迄生きてたんや。まあえゝとせんならぬ。

〔76〕  
第二夜

林文塘 西井敬岳 岡文涛

川畑春翠 川村曼舟 玉舎春輝〔暉〕

中村春楊〔陽〕 案本一洋

匡子未亡人 子嗣子清秀

〔フンブル無し〕

第二夜

座 川村曼舟 林 文塘

談会 玉舎春輝〔暉〕 川畑春翠

一 岡 文塘涛 西井敬岳

ノ 案本一洋 中村春楊〔陽〕

一 匡子未亡人 嗣子清秀氏

〔77〕  
日本に於ける山岳会の先達

川畑―早苗會〔註20〕の山岳会が出来て天幕其他の登山用具を用意して天幕開きを〔註20〕やつたのは大正七年の夏比叡アルプスの縦走に依つて天幕開きをやつたのは大正七年の夏だった。此時小野青翠君に冷言〔ヒヤ〕かされた。昔から画家がそんな消防みたいな風して山登りなどした事の聞いた事はない。叡山など下駄穿きで登つたものだ。世間の笑ひ物や―と言はれたが然し先生は、まあ君等先輩は若い者の此意氣を愛して任しといてやれ。此企には実はわしが第一に賛成したのだ〔註20〕で、わしは大に山に憧れを持つとるのや。と強い態度をとられた。此天幕や登山服などを

用意する様になったのも先生が、山で暴風雨にあつたりした時に味噌つけてはいかぬ。充分に用意して行け、と言はれるので其準備の為に私等が例の有名な登山家の小島烏水氏を訪問している。西洋の話など聞いたりしたものだ。小島氏の意見でも西洋では怙ふくだが夫れが果して日本にあふかどうか分らぬ。と云う程度の話より無かつた。夫れで私等が、西洋の例に日露戦役での露營の円蓋の経験（79）を参酌して天幕を改造（79）造つた。天幕の周囲を掘って天低く張り暴風雨にも抵抗を強くし、更に携帯に便なために四個に分解される様になり、夫れに各自の金剛杖を継ぎ合せると柱となり、其杖の先には飛口がついてゐてアルペンストックの代りともなる。

文林―一番重いのはピッケルと天幕だつた。

西井―疲れてしまつて愈々写生せんならん時にはいやになつた。

川畑―炊事のアルミ鍋は師匠の考案で蓋が俎（80）となり、運搬時は中に物を入れて背囊に付け、天幕の中央の三本柱に釣れる様にして中で火を焚く時にも間に合ふ事になつてゐる。其後三高から聞きに来て鍋などは参考に貸してもやり、天幕は私が出掛けて行つて指導して、早苗会のよりもつと進歩したものが出来た。

案本―白馬に行つたのが本式（80）登山の最初だつた。

中村―僕は其時炊事軍曹だつたが、せつせと飯焚きをやつてゐる間に、皆は写生してゐる。後仕末の間も寫生に出掛ける。愈々自分で寫生でもやれる時間が来ると、もう出発だと云ふので到頭寫生が出来ずじまひだつた。

林―素敵に辛いライススラーを喰はされたのはあの時やつたなア。

中村―容子が分らなくてカレー粉を一瓶一度に使つてしまつたので…

林―先生があの時、怙ふ云ふ処では刺戟の強い物の方がえゝ。此位の物を喰はぬといかぬと上手言ふたはつたがなおら（82）せた。

川畑―師匠は寫生してゐられても、十五分で歸へらぬと飯を喰はせぬと云う事やつたし、もうやめて歸へらう、と言はれては寫生の紙を巻かれた。あの時は汁一杯でも嚴重なもんやつた。

中村―食糧が盡きたら山に籠城せんならんし、無闇に喰はしたらあかん、と師匠の命令やつた。

川畑―そうや、あれは出発の時ステーションで私から師匠にお願ひして、軍隊式に訓示をやつて貰ひ、旅行中は實際軍隊式に命令でやつて貰ふ事にしたのだ。集れ、圓陣作れ、休め、と云ふ調子で嚴重に山岳会訓示が申渡された。酒はもう寝ると云ふ時でないと飲んだらいかぬ事になつてゐたが、師匠はウイスキーを持つてゐられて一人でやつてられるので皆が羨ましがつたものだ。それで不良共が一策を案出し、先頭をグンぐ急がせた。御老躰の師匠もやりきれなくなつて、最初は寫真機をオイ是れ持つてんかと渡された。が、ウイスキー（84）の瓶は自分で持つてゐられて離されぬ。それを死んだ大八木桂月君が、先生わし持ちませうと到頭その瓶を占領してしまつた。そして歩るきながらチョビくやつて、是れとてもえゝウイスキーやと一人で喜んでゐるのを見付けられ大分いかれたりした事があつた。白馬で泊つた時は六合目の丁度雪溪に掛りかけた辺で、初めて雪を踏んだ処だつた。そこに天幕を二つ張つた。

白馬山上の嵐天嶮裂破

中村―えらいあらしがやって来たぜ。

案本―岡さん（岡文涛）から電報で見舞が来たのに先生が返事を書かれたが、最後の文句が天嶮裂破としてテケレツツパーと降（カ）ふり假名がしてあったのを覚えてる。

川畑―そんな頃はまだよかったが、夜の十時頃になってからほんま物のあらしになつて、ゴーくくと物凄い音がして外になど一足だつて出られなくなった。そうしてると先生と草島さんの天幕が倒れた。それで皆が此方の天幕に來られて、愈々天嶮裂破になつて来た。（86）どうせ眠られはせぬから今夜は飲み明しや、と大騒ぎをやつた。

中村―雪が砕け落ちる音がとても凄まじかつた。

川畑―夜中にゴーくくと云ふ音がし続けなのだから、到底も寝る様な大胆な者はなく、それでなくても一つの天幕に三十六人鮎詰めでおまけに傾斜地に天幕が張られてるので、飲んで騒いでいる連中が上の方からズルく（すべ）こつて来る。

川畑―翌日起きると天幕の上に一斗ばかり水が蓄まつてゐた。その天幕を畳んで持つて上り、九合目のお花畑迄廿七丁ある。廿五六丁の処で雪溪が無くなり大岩となり所々残雪がある。それからお花畑だ。

中村―翌々日はお花畑に天幕を張つたがその綺麗な中お花畑を掘つてゐる時は實際勿躰ない気がした。その夜はお花畑の中に寝た。

川畑―小早川君（秋野）と高橋君（秋華）とが、アルペンストックを使ひながら、こんな事をさせるなんてと文句を言つたりした。私は内緒でリュックサックの中に麦酒を一本持つて来てゐた。それを雪の中に入れてゐた。

雪解けの水を汲んで米を磨きぐのが却々大変だった。草島さんが、いくら乾いても雪を喰くつちやいかぬと言ふのでそれも喰くへない。それで私は先生に、素敵なものがありますと言つて今の冷えた麦酒を持出し、皆で金椀（カ）に七分宛ほど飲んだが、そのうまかつた事と言つたら無かつた。その後で辛いライスカレー。此處に二泊（第八十九集）した。御来迎（ご来光）を見たり、絶頂を極めたり、釋氏鎗（カ）の方に行つたり、スケツチしたりした。

立山々中の奇夢持佛觀音像毀る

西井―先生が「山二題」（注21）を描かれる時、一度山岳を実地に寫生したいと言はれて立山に行かれた時、私は唯一人でお供した。朝早く出て夕方に麓の（アシケラ）に着き一泊し、人夫を雇つて夜明に登つた。阿弥陀ヶ原あたりには先生のお好きな杉の老木が沢山ある。雷（カ）に打たれた様な形の半ば朽ちた巨杉があつたのを先生は寫生されたが、そこで時間をとられて日が暮れて来た。そんなら此近所に樵夫小舎（カ）を捜せ、と云つて人夫に案内させて入り込んだが、疲れた躰を横にするや否やとても猛烈な（カ）蚤だ。木（カ）擱挽の粉の中に沢山あるのだ。それで防寒具で袋を急造して其中に入り首丈け出して寢横（カ）になつたが、矢ツ張り眠られないので到頭外に出て夜明した。夜明に登つた。ところが天候が俄に變つて来て、雲が盛に下から騰（カ）ってくる。諸戸に着いた時には全く咫尺も弁（カ）ぜぬ有様だった。濃厚な雲（カ）煙（カ）と氷の様な雨が下から上に襲つて来る。午後三時頃だったが寒くてやりきれなくなつた。取りあへず焚火をして寒さを防いだが、外になど出ら

れはしない。三人で■塊る様にして夜を明かしたが、其夜物凄いと何とも言ひ様がない位だった。翌日になると幸ひおさまったが、スケッチ■など出来る段ではない。剣ヶ峰が時々雲煙の中から出るが、直ぐに又隠れる。と云ふ有様で、此天候は三日位は霽れないと云ふ事なので92極局目的は達しないが、そう永く居るわけにも行かず下山する事になり、半途程迄下りるとか93ころツと変った天気だ。午後四時頃に、前夜泊った所近く迄来た。そこに大きな岩があり前に溪流があり岩陰に入ると大変涼しい。先生はその岩陰に入られて、持参の小さな観音像を出されて岩上に安置し、香を焚いて黙禱してゐられる。それで私達は川の方に行つて休んでゐた。暫くしてもう出発したがいゝと思つて、岩陰に行くとい先生は昼寝してゐられる。お起しすると、あゝえゝ93氣持だったとそこを出られたが、数回程来たと思ふと突然ゴーツと云ふ凄じい音がして、今迄先生が休息してゐられたあたりに大岩が沙煙（マヤ）を立てゝる。驚いて行つて見ると丁度出張つてゐた大岩がすっかり落ちてゐる。もうすこしの事で其奥に寝てゐられた先生はどうなられたか知れない処だった。先生も、全く観音像の利益だと言つてゐられた。

清秀―何でもその観音像を奉案（案）した竹の矢立が二つに割れた夢を見られたと云ふ事だ94。丁度その出発前に私が病気で寝てゐたりしたので、旅先で迄心配されて始終観音像に祈願してゐられたのだと後で聞いた。

西井―その出発の時、人力で先生の方から行くと、門口を出たところ  
で私の方の俵の灯がパツと消えた。鳥渡氣色が悪かったが、いらぬ

事言ふではないと思つて何も言はないでお供したのだが、先づく  
無事に過したので、ヤレくと思つてると此騒ぎだった。

清秀―大正元年の九月の事だ。

95  
熱心巧妙な寫生

### 創案巻取写真(板)機

西井―それが先生の高山登攀の初めかと思ふ。何でも其時先生は杉の古木を大變寫して來られた。それから後（作品）杉の老杉をとり入れた作品が大分出來た。一鉢先生の寫生は非常に（早）熱心で早やかだった。一緒に同じ処の寫生を始めて、せつせつとやっていると先生が済ましてサア行かうと言はれる頃には、此方はやつと半途のところだった。

川畑―穂高に行つた時の事だが、此方は餘りのいゝ眺めにぼーツとなつて見惚れてると、先生は赤でもなし白でもなし白群でもなし、此色がなアと頻りに寫生して（早）ゐられる。オイ煙草をくれと言はれたので氣付くと、先生の寫生はもう大分出來てた。

西井―先生の寫生板は先生創案の巻取式とでも云ふ式になつてゐた。此創案は大分古い事だ。何でもお池（注22）にゐられた頃、春汀君と二人であゝでもないこうでもない頻りにやつてゐられて、それでやつと出來たと言ふ事だった。

川畑―あれも後から後から改造されて、白馬に行つた時分には完成してゐた様だった。（注23）あの出來描いた部分を巻込む丈けの設備は出來たのだが、夫れを（巻込んで）見直（さうとする）のす為めに巻返すに仕掛けに大分苦心されたらしかつた。白馬に行つた時夫れを見せられて、是れは

新式や。春汀も造つてるがあれは旧式や、と自慢してゐられた。

林―初めは三脚に付いてゐたと思ふ。

清秀―九州に行かれる時には矢立が取付けられる様になつてゐた。

川畑―一番おしまひは上高地だったが、あすこは開けてるからと云ふ

ので天幕無しで行く事になった。島々の藤屋の婆さんが喜んで、大

きな岩魚をとつて来て待つてくくれた。先生は大変お元氣で廣い川

原で頻りにやつてゐられる。ほつといつて帰へられもせず暫くおつき

あひしてもゐたが、どうもそう永くは續かぬ。大分して鳥渡休みに

歸へり暫くたつて行つて見ると、丁度先生も寫生を終つて歸つて来

られるとこだった。其時先生が言はれた。君等は山の形丈けを寫し

とけば夫れでえゝ氣になつてよるが、山は雲煙によつて刻々に

感興を変えるのだ。それを知らないかぬと。其時先生は變化する穂

高も寫されたが、立枯れになつた落葉松なども大分寫された。

西井―いかにも楽し相に寫生してゐられる。いくらやつても飽かれぬ。

後になればなる程次第に楽しさうにやつてゐられた。

林―全く先生の寫生は達者でまめだった。僕等だと時には面倒な氣が

して、まあ歸へりに寫さうかと云ふ様なところを、先生はちつとも

そんな事がなく、いゝと思はれたらすぐ何處でも寫生された。

西井―行きさへすれば何處でも屹度目星しいものを寫し取つてゐられ

た。

川畑―先生が寫生帖を出されるとつひ此方も出す氣になる。大正池で

先生が、此処らで一休みしたらなアと言はれるので寝られるのかと思

つたらスケッチされるのだった。

西井―先生の登山は、立山と穂高が一番初めだらう。

川畑―山岳会が出来てからは、比叡、白馬、上高地、乗鞍、穂高、槍、

富士、黒部、澗、英彦山、阿蘇、高千穂と随分行かれたものだ。

案本―伊吹にも登られた。

清秀―それに塩原があり戰場ヶ原もある。

川畑―吉野にも行かれたし：

西井―先生の鉛筆のスケッチは見た事がない。いつも矢立だった。矢

立の寫生は却々鳥渡やれぬ。難しい。然しあれでないといかぬ。

林―鉛筆の寫生は一冊もないだらう。

清秀―ある事はある。

#### 「塩原の奥」の頃青邨古徑と會飲

川村―二三年前の事だが、美術院の前田青邨君と話した事がある。先

生は近頃御壯健かと訊ねられて御丈夫な事を話すと青邨君が、山元

先生は非常に愉快な方だと前置して恁麼事を話した。文展第三回に

先生が「塩原の奥」を出品された前年の事だと云ふ。前田君が小林

古徑君と二人で塩原に行つて塩の湯に宿つた事がある。落着いてか

ら宿の者に誰か客があるかと聞くと、文部省の審査員で山元さんと

云ふ人が宿つてると云ふ返事だった。然し二人共山元さんで名前は

聞いてゐてもどんな人かまだ知らなかつた。で、その人はどうして

と訊くと、盛んに飲んでると云ふ返事だ。会ひに行つて見やるか

と二人で話し合つてるところに、先生も宿の人から二人の來てる事

を聞かれて、飲ましてや「第百四葉」104るから來いと云ふ返口お使ひが

来た。それで二人で出掛けて行って大に気焔を聞かされもし又二人も負けずにやった。夫れ丈けで別れたのだから、スケッチも何もしないで唯飲んでばかりゐたと思つてたら、其翌年文展に「塩原の奥」が出品されて評判だったので、あの時はもう寫生した後だったので、出品を見て思ひ當つたと云ふ事だった。

林―上高地に行った時、二日雨に降り込められた事がある。團長から酒は飲むなど云ふ命令だったのだが、恚ふ降り込められては飲まぬ訳にいかぬ。宿の主人がやって来たりして、チョット位よからうと盛んに飲んだ。二日目になつたら喰ふ物が無くなつて棒鱈の生干ばかり喰はされた。こんな物が喰へるか、と私等が食糧探検に出掛けると、宿の前に蕎麦屋のあるのを見つけた。こりやえ、物を見付けたと早速上り込んで注文すると、今言つて今出来ぬと云ふ。御注文があると打つので午後三時頃来てくれと云ふ返事だ。何でも変つた物が喰へると云ふので勇んで其時間に出掛けて、打立ての蕎麦を大にやりながら、不図見ると丁度そこは先生のお部屋と向ひ合つてゐる。忽ち先生から見付かつて、やッえらいものを見付けよつたなア、一杯持つて来いと云ふ事になり、雨、宿りの憂さも、忘れる様な騒ぎだった。

川畑―島々でもそんな事があった。あすこの食糧は皆馬で他所から搬んで来るのだが、雨で道が迂るので喰ひ物が無くなり、岩魚は水が濁つてとれず大分閉口にした。合作をやらうと言ふ事になつたが、そんな大きなものが無いと云ふので、障子をぬらして紙を剥がして来たものだ。

林―そうやく、青紅葉に蟬か何か出来た様だった。  
川畑―林君が葉を描いたが後が出ぬ。恚ふ云ふ時には畫才を試すのだと傍が大分八ヶ間しい。  
川畑―到頭風鈴の影を描いて逃げた。

#### いろいろな思出

林―僕は絵が好きだったのでまだ絵をやらぬ前から展覽会など見に行つてた。それで覚えてよるが、先生の「荒村暮靄」は今でもまだ目に残つてよる。

川畑―あの絵は、我々学生仲間での朦朧派と言はれた先生とは反対派の連中が皆感心してしまつた程だった。桂次郎なんと云ふ連中が…  
岡―其後に出来た「夏の海辺」の岩もやかましかった。

玉舎―先生の名前もあの頃からやなア。

岡―然し矢ツ張り一番強く打たれたのは「荒村暮靄」だ。

玉舎西井―僕等は夫れを知らぬ。

川村―僕もその「荒村暮靄」に感心して塾に入れて貰つた。

西井―其頃先生には何人位弟子が居たのかなア。

川村―十二人位だったと思ふ。

西井―早苗会はいつ頃出来たのや。

川村―僕の入塾したのが卅一年で、塾生の作品を初めて陳列したのは卅三年一月だった。今の早苗会は実は一回々数が多くなつてゐるが、お池の先生のお宅で第一回の同好会が開かれた時には二十点の出品があった。第二回は裏寺町の妙心寺で陳列した。先生も第二回から

出品される様になって、夫れからずっと大抵出された。元來が正月に皆遊んでしまふからと云ふので始められたのだった。其頃ゐた人は高井梅溪、小野青翠、山路梅村、春吉田春香、木村春圃、藤田橋端井藤蔭、平田秋穂、木村春圃、藤江正氣、小川確齋、庄田鶴友の諸君だったが、小野君は経費が勿躰ない<sup>(11)</sup>と出品しないと反対しよった。玉舎―僕の入塾した二年後、丁度大阪の博覧会前だったが、僕が窒扶斯で寝込んでる病床に師匠がわざわざ見舞ひに来られたのに感激させられた。

川畑―大正二年に学校で朦朧派として先生に反対した連中が皆入塾した。その連中や千種掃雲、芝千秋、小川千甕、久保井翠塘、秦アルヲ、平井椋仙等と一緒に成つて丙午会を組織し、隔月に展覧会を開いたが、貧乏書生の集りだったので来賓に出す菓子が無い。その頃先生は殆んど毎<sup>(12)</sup>回見に来られた。そすと千種君が大急ぎで菓子を買いに行く。その容子を先生はよく知つてゐられて、一度など、「恁麼会に菓子など出さぬでもえゝやないかと言はれた事<sup>(13)</sup>があつてハツとした事がある。丙午会は千種君が竹杖会の塾の研究会の時松園さんの絵をぼろくそに言つた<sup>(14)</sup>の<sup>(15)</sup>を<sup>(16)</sup>如<sup>(17)</sup>が、栖鳳先生は却つて夫れを<sup>(18)</sup>褒められた事から何かやる氣になつてゐる如に、僕等の連中が学校を出たので夫れ<sup>(19)</sup>後暫くやめてたらと一緒になつて出来たのだ。

林―山元先生はちよつとした展覧会にでも、案内があると屹度見に行かれた。

川畑―丙午会を解散する時、千種君はもう竹杖会に歸れぬと言ひ、僕は山元先生の処に行く<sup>(20)</sup>と相

談した。

未亡人―室町丸太町時代やと思ふ。雲ノ畑でとれたと云ふ熊の子を貰つて飼つてゐた事がある。氣嫌のいゝ時は可愛いゝのだが、何か氣に入らぬ事がありでもすると怒つてすぐ爪を立てるのには閉口した。牛乳で育てゝゐたが、人間より熊の子の方がたんと飲む。何でも三四ヶ月位ゐた様に思ふ。その後誰かに上げたのだが、夫れがどんな順序でだか<sup>(21)</sup>大正天皇<sup>(22)</sup>高貴の方様のお側近くに飼はれたと云ふ話を聞いて、豪い出世やと喜んだ事がある。

あの頃よく鞍馬あたりへよく皆で写生に行かれたが、雪の降る<sup>(23)</sup>つた朝など早くから塾生の方と一緒に出発するのに、お弁当を造る隙がないので横町の芋屋に頼んで蒸し立ての暑いのを皆で懐炉代りに持つて出掛けられた。こんな事も室町丸太町時代の事だ。

西井―京都の近郊<sup>(24)</sup>なら何処でも先生は寫生して廻つてゐられるだらう。

川村―雪が降るとすぐ出掛けられた。

未亡人―御苑内、二条離宮、圓山公園と雪が降ると何処かしら寫生に出掛けられた。御苑内の松は大方寫してゐられるだらう。

寫真は二十歳位から始められたらしい。私が来た時には、鈍な大きな暗函が据えてあつた。

怖かつた先生

林―中立売時代<sup>(25)</sup>には本箱があつて其中に機械が一杯つまつてゐた。いろんな機械を集めては夫れを解剖して研究してゐられたのを覚えて

る。

川畑―確か先生が学校に入られた年かと思ふ。生徒と一緒に八瀬の方に寫生に行った事がある。その時豆腐屋で休んだら、その婆さんがあんたら繪師なら何ぞ描いてくれんかと襖を指した。よし描いたろ、と言はれて先生が炭俵の藁を塊めて墨を浸ませ、布袋を描かれた。今でも残ってるかも知れぬ。その頃もそうだったが、先生の寫生は早やかっただので、充分に写しきれなかつた連中が後で先生の寫生を借りて写した。それで終ひには誰も彼も先生のを写して、皆同じ寫生が出来る様になつた。

西井―そうや〜先生の寫生の後写は我々もよくやつたものだ。実は夫れで寫生のやり方を覚えた様なものだ。

玉舎―自分でノロノロやつてるよりは餘ッ程先生のを写さして貰ふ方が早かつた。

川畑―先生の寫生をうつしたのを出すと、誰のも五十点より點てんをくれられなんだ。試験の時など少しは変えとかんといかんと言ふので、庫や杉の木などを拵らへて出すと、試験試験のときなどいのときなどいいつもと違ふやないかと冷言されたりした。

案本―専門学校に入った翌年だつたと思ふが、六曲屏風に岩のある雪の山をやつたが、どうもうまく進まないで薄く〜やつてる処に先生が来られて、こんな事ではあかんと自分で筆をとつてグツ〜と強くやつてくれられた。大抵の連中がどうやつてえ〜か見当がつかない時には皆うすくやつて先生の来られるのを待つてゐた。

川村―山下竹齋君と宇津見内海一山君とが一番よく叱られたのを記憶し

てる。

林―一番恐ろしかつたのは御池時代から中立賣に掛けての頃だつた。先生の三十一二歳頃だ。高倉のお宅を譜普請されたのは四十二歳の役年だと聞いている。その恐ろしかつた時代の事だが、同好会の出品の下絵が却々通らぬ。明後日搬入と云ふ日になつてもまだ下絵が直直らぬぬつてゐないので持つて行くと、山下君が草稿を抱えて門の処でで泣いてる。通らぬ連中には碓氷アキヤマ君君とも高橋秋華君とがゐる。夫れで三人が碓氷君の知ってる寺に行つて三人で三枚の草稿を作つて夜明けを待つて先生のお宅に出掛けたが、先生は夜が遅かつたので却々起きて来られぬ。焦々しながら待つてると十時頃になつてやつと起きて来られた。其草稿を見られ、よよッッししッッヤヤレレツツ、と言はれて夫れから不眠不休で一日半掛りで仕上げ持込む時には先生から裝飾を手傳つて貰つたりした。同好會前となるとよく先生のお家を借りて絵を描いたが、御隠居さんの寝たはるお部屋に迄絵を持込んでやらして貰つた。右寝床の右右でも左左でも絵をかいてる。夫れで御隠居さんは、寝て、日月やと冗談言つてゐられた。

西井―有楽館時代の同好会には、先生の画室から絵の道具が全部ひっこしたものだ。服部春陽君が大きな物をやつてゐて上から下迄岩が描いてあつたのを先生に見せると、全部剥がせと言はれて、眞ッ白ろけにした事があつた。あの頃は先生も一緒に徹夜だつた。

林―外出先からフロックコートで歸へられると、塾生がウンと詰掛け詰掛けて来てるので、眞眞上上着着をとられた俣明日の朝迄ずつと続く様な事もあつた。

## 玄関番の追憶

西井―唐紙に半折を描く研究会があつて、いくらやつても思ふ様に描けんののでいつの間にか右にも左にも描き損じの半折が山の様になる。<sup>(124)</sup>

その中で描いた。夫れでも僕は先生から二度褒美を貰つた。

その頃玄関には中島春鷗、中村春楊、高山春凌の三君が居た。其部屋は台所の近くで、ホン近くに酒樽が据えてある。奥とは大分離れてるので、ほっこりした時など茶碗でキュウツとやる。初めは分らなかつたのが、いくら少し宛でも始終やる。うちに到頭知れて叱られた。御池には穴庫があつて中にビールが何本も何本もしまつてある。高山君と二人で女中さんのお松どんを味方にして置いて、そつと盗出して昼間は半折の山の中に匿して置いて、先生が奥さんと御一緒に晩に散歩に出られると、そつと持出して二階で涼みながらやつたもんだ。或る晩、出られたと思ふとすぐ先生方が帰つて来られて、大急ぎで二階から駆け下りて玄関に出迎へたが、僕はそう顔に出ない性分だが高山君は眞ッ紅になつてるので、硝子障子の後方に小さくなつてお歸へりやすと下げた頭を却々上げ得なかつた事がある。春汀君は甘黨だつたので、圓い硝子瓶に入れてあつた菓子盗み出して来てゐた。

川村―台所から酒を盗み出す時、樽の栓がキューツと鳴るので、女中さんに井戸の釣瓶をで音立て、貰つたと云ふ話があつた。

未亡人―高山さんと二人狐にだまされはつたのもあの頃やつた。

西井―そうく、高山君と二人、確か六十銭か一円二十銭か持つて

賤ヶ岳方面に寫生に行った時だつた。歸へりに今津迫来たらもう一銭も残つてゐないので、どうあつても京都迄歸へらんならん、とやつて来だか腹がへつて堪らるので、畑から大根を抜いて来て雨で濁つてる田圃水で洗つて、歩るきながら嘔つたものだ。大津に来た時はもう夜中の一〇時頃だ。餘り疲れたので或る家の軒下で床几をを下ろして其上に寝込んでると、巡査に見付けられて誰何されて又トボくくと歩るき出した。山科に来るともう二時頃だつたらう。見ると山に火が燃えてる。そして僕等の行くく道の彼方に白いものがポーツと居る。雨は頻りに降つてる。山の火はぼつぽつと消えては燃えともり消えては燃えともりしてる。屹度これ狐火やで、と二人夫れでも元氣な二十台代だし別に怖ろしいとも思はずグンぐん進んで行つた。天智天皇の御陵あたりに来た時、白いものがツーツと阪の上にあがつて行つたと思ふと、山の火も消えて無くなつた。先生のお宅に歸へりついたので朝夜明前の四時頃だつた。曙二条の新町あたりで夜が明けた。皆寝たはるので表で待つてると、お松どんがやつとして起きて来て明けて貰つた。

## 油絵研究時代の頃

林―中立賣時代には先生は盛んに洋畫を描いてゐられたのを覚えてる。

よく桜井忠剛さんが見えて、二人共薔薇の花ばかり描いてゐられた。

曼舟川村―瀧の絵もあつた。

林―薔薇が何十鉢となくあつた。

川村―桜井さんより先生の方が餘ッ程うまかつた。

## 美術学校時代<sup>(130)</sup>

川畑―美術学校の専攻科にゐた頃こんな事があつた。其時の校長は上田正當と云ふ人だったが、生徒は衣紋竿と云ふ綽名をつけてゐた。その校長を初めとして生徒我々が先生達の似顔絵を描いて騒いでるところに、突然先生が入つて来られた。狼狽してるのを平気な顔で先生は、うまいもんなやなア、わしも描いたるか、と硝子戸に糊の塗つてあるのに指で生徒の似顔を描かれた。生徒達は大喜びで、我れもく〜と皆で硝子戸一杯描きなぐつてしまつた。<sup>(131)</sup>夫れが知れて級長と副級長が呼ばれ、校舎に落書するてあるかと叱られた。ところが生徒も黙つてゐず、絵は興に乗じて描けばよくできるものだとか何とか言つて濁して歸つたが、直ぐそこに上田校長がやつて来て一々其似顔絵を見廻り、何だ俺の顔など描いてあるぢやないか、と苦笑しながら山元先生の描かれた住谷君の顔を見付けて、是れは大分上手に描いてあるが誰が描いたのだ、と訊かれるので正直に返事すると、何だ山元君<sup>(132)</sup>こんな事やるのか、と言つた假校長はすう□ツと行つてしまつた。暑中休みの間に皆磨り硝子に變つてしまつてゐた。

岡―川畑君の学校に行つたのは何時だつたかなア

川畑―お池の頃で、何でも其頃お池の先生をお訪ねすると、二三人学生が来てゐて何か理窟を言ひに行つて居られた事がある。<sup>(133)</sup>先その中に岡君もゐられたと思ふ。先生が学校に入られて間もない頃だつたと思ふが、大分激論があつてた様だつたので、僕は入らないで門口で様子を覗つてゐた。

岡―そう〜そんな事があつた。美術学校の三年の時で、川畑君などは其一年上だつたが、丁度其頃ストライキ熱が流行つて、何でもやらないかぬと云ふ事になつてゐる処に丁度先生が入つて来られたのだ。

川畑―そうや別に悪い意味でもなかつたのやが、先生に対しては加筆すると云ふ事を問題にしたと思ふ。<sup>(134)</sup>

岡―丁度私が級長だつたので、清水古閑光宗幸造と云ふ様な連中がやつて来て頻りに口説く。然し私は、行つたかて叱られるにきまつてるがなと云ふのだがきかぬ。それで<sup>(135)</sup>中立室町中立賣売□辺の清水君の下宿で上申書を書いて出したものだ。そすと生徒心得第八条とかに依つて退校処分にするとか何とか嚇されてやめてしまつた。其陳情に二三人で先生をお訪ねした事があつたから或は其時やる。國友武雄と云ふ男がゐて内通した<sup>(136)</sup>てゐたので、先生は何も彼もよく知つてゐられた。

玉舎―僕は先生に群青ときで叱られた事がある。水で溶くなんてあるかツと。

川畑―あの頃は朦朧派が流行つたもので、晝画箋紙を湿らして描いたものだ。

林―院展の西郷湖<sup>(137)</sup>あたりが張本人だ。

川畑―あのストライキの原因は、何でも修学旅行に補助金を出して欲しいと言ひ出したのに、学校の方からは出せぬと言ふ事になり、それで始まつたと思ふ。夫れが下の方の級にも響いて行つたと思ふ。

岡―上級には北垣静処がゐた。<sup>(138)</sup>

川畑—あの男は乱暴だった。安田の様に東田<sup>〔注29〕</sup>に投書して論戦してゐた。竹内さんの羅馬の古城に、何でセピアでやるのか。墨で何故やらぬか、などと去ふ議論を吹き掛けてゐた。

岡—川村君の学校へ行たのハ何時たつたかナア

○川村—僕は三十五年に長尾君の後をうけて学校に入った。

岡—僕の卒業製作はバリシーの製陶図と云ふハイカラな図題だった。

川畑—あの頃の先生は、刷毛の擦り切れたので、セピアをやたらにつかつてゐられた。

西井—殊に大刷毛がお得意だった。

川村—「法塵一掃」なども刷毛描きだった。

林—大阪の五回博の「孤猿叫雪」の岩などもその刷毛描きだった。

玉舎—先生の刷毛は必ず割れてないかぬ。

川村—文展に出た「海月」の岩もそれだった。

林—山の岩の端の光つた処など割れた刷毛で實に上手にやられた。

川畑—「荒村暮靄」<sup>〔注31〕</sup>を見て、ストライキをやつた連中も皆感心してしまつた。金泥の霞など皆堪らぬと思つた。

### 颯爽たる風姿

西井—あの「荒村暮靄」が先生の出世作やな。

林—あの会場で先生が洋服を着て歩るいはる後姿を見た事があつて、あッ先生や、と思つた。竹内さんの出品は「緞蔭放牧」<sup>〔注32〕</sup>だった。西井—あの頃は餘り洋服など着る人も居なかつたので、先生の洋服は目立つた。髭をチツクで固めてゐられたが、そんな先生など外に

無かつた。

岡—梓に絵を立てて描く事は先生の發明やないかしら。望月玉泉さんが或る先生が、絵は下に置いて描かぬと藤田に力が入らぬからいかぬと反対されたら先生が、絵を描く時にはそう云ふ事も忘れないかぬと云ふ様な調子に應酬されたのを覚えてる。

川畑—兎に角素晴らしい評判だったので、僕等上級生の仲間にも山元さんの教室を見に行かうと云ふ話が出たが、授業中は一切入つてならぬ事になつてゐたのを何かの用事を作つて行つた事がある。梓を立て、描くなんて、そんな事やつたら絵具が流れて描けへんがな、と冷語してもゐた。何しろあの頃は若い者も乱暴だったが、先生方の方にも乱暴な人が随分ゐた。卒業式の記念寫真をとる時に寫真屋が松年さんに何卒正面向いとくれやすと云ふと、莫迦以後る向いてたかて松年と云ふ事は分るソ、と叱り付けた事がある。

岡—何でもあの頃、学生が松年さんを訪ねると何卒と云つて通された部屋に待つてると暫くするとネルクと簾が上がつた、と思ふと其奥に松年さんがあやはつた、と云ふ話がある。竹内栖鳳さんの話をすると、フォームそんな事かまが居よつたかいなア、と云ふ返事で暫くして、魚屋の息子とちがふかと云ふたと云ふ話だった。

岡—そんな先生達のあられる頃に山元先生が入られたのだから、先生はハイカラだった。然しあの頃の生徒は皆やり手だった。其中でも川畑君くんが大将だった。

川畑—阿保かいな。それでも父が裁判官だったので、ストライキの時などおやぢさんに口を利いて貰へると云ふ事になつて、父に交渉に行つ

たがテンで取合ひもしない。物騒な時代で服部春陽君など暗討事件があつたりした。

此頂生かす

林―僕は絵が好きだったのでからまだ絵をやらない前から覚えてるが、

先生の「荒村暮靄」など目に残つとるなア。

川畑―あの絵は我々学校の朦朧派の連中

[原稿欄外「5」]

[原稿欄外「(V) (座談會「ノ三」トメ)「

第三夜

川村曼舟 中島春鷗 村瀬秀月

植中直齋 久保田竹文 古谷一晁

小村大雲 三宅凰白 庄田鶴友

匡子未亡人 嗣子清秀氏

念〔14〕彼観音力と

敬神愛國思想

庄田―嘗て師匠が話された事にこんな事があつた。若い頃天龍寺の峨山和尚を訪問して、滔々と念彼観音力を説いたところが、和尚から大変褒められて得意になつて歸りかけると、突然和尚が、今説いてみた〔念彼〕観音の力を出して歸へれ、と言って此方が間違つてると一喝を喰はされた。決して此一喝に依つて頓悟したとか何とか云ふ訳ではないが、歸へりに見ると雲水達が廊下を拭いたり庭を掃いたりしてる〔の〕容子が、行きに見た時には誌らぬ労働〔15〕をさせられてるものだと云う位に外考へられなかつたのが、今は実に尊く見えた。世の中の事は皆慥ふしたものや、と云ふ風に諄々として説かれた事〔が〕ある。は今だに忘れられない事の一つだ。

村瀬―師匠からよく鰻の頭も信心から、と云ふ事で話を聞かされた事を覚えてる。物事は人間の力強い根強い信念〔に〕依つてが大切で、此心

があれば対象は寧ろ問題でない、と云ふ意味だと教へられ、其點師匠は大分深い信念<sup>(146)</sup>仰に入つてゐられたと思ふ。

久保田―入塾当時の事だったが、何かの事で芳文香嶠と云ふ人達と一緒に師匠が叡山に登られたのにお供しての帰へり道で、師匠から峨山和尚の事を聞かされた事があった。お池時代だったが、御隠居が、春挙は此頃は建仁寺に通ひよる。えらいえ、結構な事やが時に依るとあべこべにわしに説教してくれる事があるので、と笑つてゐられた事があった。(註十)

小村―師匠の信仰に関して一言に言へば、師匠の天分と禅とがピッタリとあつてゐた事は、師匠の折々のお話や御作品を通じてよく見えるが、師匠は終始一貫して絶対界、無の境地に入る事を念じてゐられた<sup>(147)</sup>と思ふ。始終此処に重点を置いてゐられた。

川村―師匠が<sup>(148)</sup>も一つ尊王敬神と云ふ<sup>(149)</sup>感念が、寛齋翁の影響もあつたらうが、禅と并行して強く師匠の心を領してゐた。師匠は非常にハイカラなスタイルにも不拘、毎朝早く床を離れられると屹度台所の神棚に柏手を打つてゐられた。師匠はいつも、人間の行ひは微細な事からせないかぬ。わし等は寛齋翁の生前對座してゐる時一度も膝をくづした事が無かつた、と言はれた事があつたのを聞いて、私は師匠と對座する時には座蒲團を敷かぬ事にしてゐた。夫れを或時師匠が誰かに沢山の門弟中曼舟一人は怙ふく<sup>(149)</sup>だと言つて話されたとその人から聞かされた事があつた。日常の小さな事、夫れが敬神尊王の骨子となつて現はれる。私が入塾してから三十年になるが、その当時と云ふと服装の事などもいろいろで殆んど総て着流しと云ふ有

様だった。二條新町時代、何かの話の席<sup>(150)</sup>に私は師匠に相談して、山元塾丈<sup>(151)</sup>けでもいゝから塾生が袴をつける事にしてはどうでせうと言ふと、夫れはいゝ処に気が付いた、君から皆にそう言へ、と云ふので爾來塾に出入する時には袴をつける事になった。夫れが自然他塾などでもそう云ふ事になり、今日では夫れが当然になつてしまつた。是も敬神的なところから来てると思ふ。

植中―師匠は特別に細工された<sup>(152)</sup>提厨子<sup>(153)</sup>を持つてゐられて、夫れに観音を安置され、朝夕禮拜されてゐた。私は先年主基風俗絵寫生の為めに九州に御旅行の師匠にお伴して、親しく其御信仰を振りに感激した。どんな山の中でも起床洗面の後師匠は直に此觀音像に対して黙禱してゐられたのを見て、私はその尊いお姿に感激した事だった。(註十一)

中島―その大正天皇様御即位大禮の御祝ひの時、塾でも何か祝賀をやらうと云ふ事になり、胡蝶の舞<sup>(154)</sup>や何やあつたが、その前に師匠を初めとして一同羽織袴で御所に行つて遙拝し萬歳を三唱した。附近には踊り仮装した人たちが踊り狂つてる群集が満ち充ちてる中に、塾の者ばかり羽織袴で肅然として其謹嚴な心持で御所で遙拝してる<sup>(155)</sup>を見て一團に加はつて、何とも言へない師匠の心境の尊さに打たれたものだった。

三宅―私も随分いろいろ宗教に関する事を聞いた。達磨大師の若い頃の菩提達磨<sup>(156)</sup>陀羅時代の話、歪んだ松の木<sup>(157)</sup>の正歪を懸賞で答えさせ様とした僧の話、学者の壺買ひの話、兎に角禅の悟りの話は随分度々聞かされた。

清秀—そんな話がラヂオの放送の時にもあった。

三宅—師匠は此諭譚が上手だったが、先年の九州旅行の時などにも、禅の比喩譚を集めた本を持ってゐられて旅先で愛讀してゐられた様だった。

### 穂露の庵號と観音帽のお供

庄田—今は私(153)にとつて師匠との最後と(154)して忘れられない思ひ出となつたが、五月二十日、(155)かねていろいろと厄介を掛けた或る私事の解決に就いて、私は報告や謝禮の挨拶やを兼ねて膳所に出掛けて行つた。丁度師匠は青甲社の展覧会を見に行かうとして出掛けてゐられた所だったが、わざわざ立ち返られて私の話を聞いてくれられ、其後で、もう殆んど完成したが茶室を見ないかと言はれて(156)案内(157)された。彼方此方その所に應じた扁額が掲げられてる。その一々に感心したが其内で、茶室の棟(158)入口に「穂露」と云ふ字額があつたのを見て、露骨な私は、此額は特によく出来てますなアと言ふと師匠は、此額は□今上天皇陛下の御即位大禮に役立てられた(159)齋田御用余材の御下賜によつて出来たもので、其恵みに依つて出来たと云ふ意味を「穂露」の二字で現はしたのだと云ふ御説明だった。此茶室など全く師匠の尊王心の発露だと思ひ、師匠との最後の別離を思ひ出す唯一(160)の思ひ出草となつてる。

未亡人—唯今も誰方かのお話があつたが観音像を安置した提厨子は夫れこそ肌身離さずいつも持つてゐられた。此間も西井さんからお話があつたが、立山に行かれた折或る岩蔭で鳥渡した昼寝をしてゐら

れると、今の提厨子(161)が二つに割れた夢を見られて目が覚め、岩蔭を出るとすぐ其後で上から山崩れがあつたて、危く生命拾ひをした事があつたので、是れは全く観音様の御蔭だといつも話してゐられた。又、清秀が病氣をした時御所の松の木の根方に行つては日夜祈願をこめられた事なども、信心の程を偲ばれる(162)。それかあらぬかこんな事があつた。入棺の時長老の被られる観音帽をどう云ふ訳か誰かが一緒に棺の中に入れてしまった。それも皆が昂奮してしまつてもゐたらうが、その部屋にあつた観音帽を棺の中に入れるものだと思つた人がある訳でもなく、さらばと言つてそんな物入れるものぢやないと止める人もなく、しかも入れる時勿論皆見てゐて頭の左の方がよからうか右の方がよからうか、などと相談しあつたりした事だった。それが、翌日になつて(163)長老が来られて、これから毎日来て(164)此所(165)にいるのやしと思ふてわしは観音帽を茲に置いていんだのが見えぬが誰方ぞ知らぬか、と頻りに搜してゐられる。夫れを聞いて私はハツとした。実はこうくで何の気もなしに棺の中に入れてしまひましたと云ふと、オ、左様か。まあよろし。あれは木徳寺の管長(166)龍寺俄山老師のかたみに貰つた物(167)のやが、またわしには観音帽が四つ程あるし、先生が持つて行かれたのやつたら、わしがお供して行く様な気がして(168)わしもうれしい。と言つてくれられる(169)たので、さてはど平常も観音信心をされたのを(170)改めて思ひ出されたりして不思議な気がした。(171)

## 後輩への信義<sup>159</sup>

### 門弟教養の誠

古谷―文展開設廿五週年祝賀会が東京で行はれたのに参列された時、私も記念品を貰ひにお供して東上したが、式後宴会が催され丁度其宴会の済む頃の時間に、荒木十畝先生が暹羅<sup>注24</sup>に旅行されるために東京駅を立たれると云ふので、宴会に列なつた人達が打揃つて駅に見送りに行つた。師匠について私も行つたが、其歸へりに駅で審査員T氏と會つた。T氏は大酒豪の聞こえ高い人で、其時既に大分廻つてゐたが師匠に、先生一度お宿に敬意を表しに上り度いと思つてゐましたが、今夜一軒是非寄らなくちやならぬ所があるので夫れをすませてお訪ね致したいのですが宜敷ございませんか、と言ふ。其時先生は大分疲れてもゐられ頻りに欠申<sup>伸</sup>をしたりしてゐられたが、T氏の申出があると快くお待ちしますと云ふ返事だつた。宿は其時帝國ホテルだつたが私は春汀君と二人で師匠についてホテルに行つた。ホテルに歸られたのだから着物でも着替へられるかと思ふと、て悠つくりしてゐられたらとお勧めしても、師匠はいやT君が来ると云ふのだから此俣待つてゐると狭ッ苦しい部屋に窮屈な洋服を着られた俣で、T君は酒好きだから来たら一杯出す様にボーイにそう言つて置いてくれ、と言ふ様な配慮をされる。然しT君氏は却々来ない。時間もだんぐり過ぎて行く。それで私等は師匠に、T氏は大分酒も廻つてたし今夜はどうか分りませぬよ、と言つても師匠は、いや兎に角約束したのだから、と言つてどうしても着物さへ替へ様とされぬ。その内に十二時過ぎてからT氏の電話が掛つて来た。私は此時、師

匠の地位なり年齢なりでゐて、後輩との約束<sup>約束</sup>に対して、もこんな固く約束を守られるその心情<sup>心</sup>に對して非常に感激させられた事だつた。

中島―新町のお宅の時に私は入塾したのだが其最初、私は先づ運筆の手に<sup>筆</sup>墨繪の竹を渡された。毎日々々竹ばかり描いて夫れを時々見て貰ひに持参する。一度二度三度何度持つて行つてもいかぬ。一ヶ月描き續けてもまだいかぬ。仕舞ひには竹を見て貰ひに持つて行くのが何とも言へず辛くて恐しくて、全く泣出し度くなる程だつた。やつと竹が済んで梅に移つた時のうれしさと言つたら無かつた。私は今だに其頃の竹を大切に保存して時折師匠を偲んでゐる。師匠が其頃言はれた言葉に、君は君が満足行くだけ充分一生懸命にやれつて夫れで自分で悟る処があればよいのだ、と言はれたが却々悟れないでは愚頭ついでる。

三宅―誰だつたか絵を見て貰ひに来た人ふ時に、どうも地塗りの調子がうまくいきませんので頻りに言ひ訳をしたりすると、先生はそんないつも話など耳にも掛けない風で、どうも君達は絵を描く積りになつてゐない。絵をかく事より地塗りの事を心配してるやないか。いくらよく塗つたところで絵にはならへん。タッチをよくやらないかぬ。地塗りなど抛つといつて繪を描け繪を、と怒鳴られた事がある。去年も六角会館で草稿見の時、一人大分やられてゐた様だつた。

○庄田―私は師匠の人情の深さと云ふ様な事で幾度も思ひ出がある。時折夕食の時などに、お邪魔してはよくお相手を仰付かつたが、一杯廻るとよく三題話を出せとやられたものだ。所謂三題話で、何でも

え、からそこら〔朱筆〕「〇」にあり合せの品物の名前を蓑盆でも扇子でも

持出させられるのだが、六ヶ敷いものを出せば出す程御機嫌がよかった。その品物の名を讀み入れては諧謔な落しになるのだった。その落ちが誠に人情の機微に喰ひ込むと云ふ調子だった。

山下〔166〕―私は或時雪中のお宮の絵か何か描いて見て貰った時、水の波紋をこまかにやって叱られた事があつた。雪の胡粉なども刷毛で利かさなにかぬと教へられた。

久保田―私は先刻も一寸話した叡山からの帰へりの時、盆梅をウント寫生して来たのだが、寫生したもののさてどうこなしたら夫れを絵にする事が出来るか薩張り見當がつかないで師匠の所に持込んだ事がある。其時師匠は一々丁寧に四ツ版の美濃〔注35〕にやり方を示して下さつたのは今も忘れられない事だ

## 多趣味と多藝

### 近江八景の唄

小村―膳所の別荘に逢阪山〔坂〕にあつたと云ふ敷石のありましツたが、あれは何か特別なわけがあるのかしら？

清秀―何でもあれは……〔大黒屋傳〔朱筆〕〕逢阪山善兵衛とか云ふ大変強欲な人があつ

た。いつか発心して善心に立ちかへり、何がな世間助けをやりたいと考へた末、逢阪山を往来する牛車の牛の苦痛を少しでも尠くしてやらう、と石を敷いたと云ふ口碑があるのだ相だ。その敷石が車〔168〕に磨り減らされて四五二三寸も凹んでしまつてる。夫れ其石を或る時偶然入手したので、お堂に行く途中の手洗鉢に利用したのだ相だ。

小村―石の様な固い物でも断えず同じ處を摩擦してゐると恁麼になると、門下生に対する教訓の意も含まれてゐるらしい。

清秀―よく地搗きと云ふ事を言はれてゐたのを聞いた。建築の時の地盤は一度より二度二度より三度と、大きな建築程地搗きを丁寧にする必要がある。人間にしても同様で下素地〔169〕を作つて置かねばいかぬと言つてゐられた。

三宅―夫れに就て「素心」と云ふ事をいつも言つてゐられたのも覺えてる。

清秀―「室咲の花は兎に角開けども、浮世の風に長持ちはせで」と云ふ道歌を作られて、人間は抵抗力を養つて置かなければいけないとも言つてゐられた。此歌は朱塗〔170〕の古い膳を利用して掛額とし、夫れに緑青で書いてある。

庄田―師匠は多藝だつたのに我々門弟の來ぬがその書いたものは思ひ出深く残つてる。

### 繪具剥落の法

#### 寫生幻燈說明

川村―私は昔、二尺五寸巾に海岸山水を描いて見て貰った事がある。そすと一目見られて先生は、是りやいかぬ剥がせと言はれる。剥がせて、恁塗つて仕上げてしまつたものが剥がせるものではなし、と何も知らなかつた私が恨めし相にモヂとくしながら、到底も剥がませぬと言ふと、何が剥がぬ事があるものか姫糊を持つて來い、と言はれる。どうなる事やら薩張り見當もつかない俣に私は師匠〔171〕に言はれる俣姫糊を台所から借りて持つて行くと、いきなりベトノ

と絵の上から塗りつけられた。私はハッラ／＼としながら見てみると、是れでえ、お前はもう帰ってえ。明日の朝来い、と言はれて帰るには帰ったがどうなる事やら見当がつかず、呆然翌朝行つて見ると、カラ／＼に乾いた糊の部分を裏からポン／＼と指先ではちくと、ポロリと糊が落ちて同時にその部分丈綺麗に剥けてゐた。私はこんな技術もこんな風にして教へられた。

庄田<sup>(172)</sup>一中立賣時代の事だが、畫室で絵を描いてゐられるのを拝見してゐた事がある。其時私は一廉<sup>かど</sup>お手傳ひする積りで師匠の描かれた粹張を持つて壁に立て掛けた。夫れは雪中の老松か何かの絵で、胡粉で盛上つた雪が美事に仕上げられたのに、墨黒々と落款を入られた後だつた。ところがどうした拍子だつたか、袴がさわつて胡粉の雪の上に落疑<sup>あや</sup>の墨がスーッと一筋斜めに走つてゐる。私は吃驚りしてしまつて、どうにも仕様がなく唯凝ツと佇<sup>た</sup>んでから、先生の方からは私のからだで見えない様な姿で立ちすくんでしまつた。餘りいつ<sup>(173)</sup>迫も凝ツとしてるので師匠が、庄田<sup>(174)</sup>何してよるのやと後方から声を掛けられたので、愈々以て文句が出ず、いきなり私はそこに坐り込んでへへツとお辞儀してしまつた。私のからだがなくなくなったので師匠に畫面が見えた。そすと、ウン擦れたんか何でもないがな台所に行つて姫糊貰つて来い。と夫れで今の川村君の話と同様なのだが、夫れが立派に剥けたので、<sup>(175)</sup>れが心配で心配で、お前もう帰つてもえ、と言はれるのだけれど、帰つても心配でとても眠られませぬと言ふと、そんなら團扇持つて来て煽げ、と言はれる。丁度夏だったので暫く煽いでる内に糊が乾いてハシヤいで来たのを裏からポン／＼とやる

とポロリと剥げた時に墨の趾が無くなつたてゐたのでホツとした事だつた。

二條新町頃が今から思ふと師匠の一番弟子に対して熱心な指導をされた様な気がする。漫情熾烈と言ふか、気の弱い門人になると草稿を持込む時、門口で出て来る友人に先づ、<sup>(176)</sup>どうや師匠の御機嫌は、と聞いたものだ。ウムまあ中どこやな、と云ふ返事だつたりすると、中どこかそんならわし帰るは、と云ふ連中がほんとにゐた程だつた。明治四十年前後、師匠の三十六七と云ふ頃だ。其時分に較べると、晩年の師匠の弟子扱ひは穩やかになられたものだ。

其<sup>鳥渡</sup>四五年前の事だ。先生が自分で撮られた風景を幻燈にして映して絵の参考<sup>(177)</sup>に説明をされた事があつた。是れなど屹度うちの師匠の創案<sup>(178)</sup>になつた試みぢやなかつたかと思ふ。夫れが或る時ランプに火が入つて、大きな洋燈だつたがブワ／＼と火が燃え上つたので、皆吃驚りして大騒ぎをやり、師匠はそこにあつた金の衝立<sup>(179)</sup>で消さうとすると、ブスツと抜けてしまつて消えはしない。階下から蒲團を持つて上つてやつと消しとめたが、あの時そんな騒ぎの時でありながら、金の衝立は勿躰ない事をしたと思つた。何でも其時師匠は大分ひどい火傷をされたと思ふ。

### 三、注釈

【注1】陰中・七七七日（四十九日）の忌日（解題注2）。

【注2】第一夜の出席者略歴（解題注1や『二〇世紀物故日本画家事典』を参照）

徳力幽雪（一八七三—？）日本画家。世々本願寺の絵所である徳力家の十一代目。明治六年、京都生。名は一寧、耕太郎と称する。森寛齋・巨勢小石に師事する。

革島彦一（一八七四—？）魅屋町通蛸薬師上ルの革島医院（登録文化財）の院長。一八九六年、京都府医学校を卒業。外科教室に入り、猪子止戈之助の教えを受けた。のち、府立医科大学付属病院の第二外科・伊藤隼三教授の助手に採用され、当時、ドイツで創始された脊椎麻酔を追試し、日本の麻酔を導いた府立医大の先駆者の一人になる。

神阪雪佳（一八六六—一九四二）京都生、近代の図案家にして近代琳派の日本画家。名は吉隆。明治四一年（一八八二）、一六歳で四条派の日本画家・小野村賢と鈴木瑞彦に師事。同二〇年に川島織物で図案の仕事を始めると装飾芸術への関心を高め、同二三年には品川弥二郎の紹介で図案家・岸光景に師事して工芸意匠図案を習い、岸が傾倒した琳派に開眼。京都美術工芸の技師に着任して

図案を中心に、『百々世草』や『海路』など図案集も精力的に手掛けた。グラスゴー国際博覧会の視察をはじめ農商務省図案展覧会をはじめ各種審査員を務めた。

田中主事医 春挙と父山元善三郎（二休）、両名のかかりつけ医師。

田中亀太郎（一八六三頃—？）座談会の話者のなかで「春挙先生とは一番古い昔馴染みかと思えます」（第四六葉）という人物。春挙が森寛齋の内弟子として木屋町に住んでいたころ、田中亀は近所の商家、矢代仁兵衛に小僧として入っており、やはり近所の青木松次郎（清水半兵衛の小僧）と三人でよく見知った関係であった。「共々家を起さんならぬ身分やと云ふので」、まず田中と青木が続いて春挙が二〇歳の頃、盃を交わし、三人義兄弟の関係であった。座談会当時は東京にも顧客を持つ商店として、客の土産に竹内栖鳳の半切をまとめて買い込むほど成功している。座談会当時七〇歳。

中島華鳳（一八六六—一九三三以降）森寛齋の門人。春挙の先輩にあたる。名は憲章。華鳳は号。書を富岡鉄齋に学び、交友も厚かったことで知られる。鉄齋の肖像画として最もよく知られる作品は華鳳によって明治四一年に描かれたものである（京都国立博物館蔵）。通常は、寛齋から継承した円山派の写生画法で作品を手掛けるが、特異な山稜の造形と構成、粗い筆さばきによる鉄齋風の山水画も描く。一方で、他の画人の作品を正確に模倣した模本作品を描くことにも情熱をみせており、伊藤若冲筆伏見人形図（白澤庵蔵）といった模本のほか、長澤蘆雪筆赤鬼抱要石図（ホノルル

美術館蔵）は、模刻された印章も捺され、上質な表装によって仕立てられているため、原本と見まがうほどである。

その一方で、狂歌向けの戯画は、大胆な筆遣いで対象をひとつかみで表現する、軽妙で機知的な作風である。出品歴は内国勸業博覧会、シカゴ博覧会などがある。鉄斎夫人の春子が愛媛出身であり、鉄斎は度々愛媛に滞在して三津浜の朝市を描いた名作「三津浜漁市図」を制作したが、華鳳も鉄斎のつてを頼ったのか、愛媛を訪れて数々のスケッチを描いている。

郵松雲外（一八七〇—一九三八）明治三年愛知郡小田苅村（現在の東近江市）生まれ。石島佐治右衛門の二男。幼名は由松、名は貞、字は子堅、諱は延長。初号は濤山。別号に鶏伴堂、蘇仙庵などがある。一三歳の時に神崎郡川並村の塚本家に奉公に出たが、生来画を描くことが好きで、二〇歳の時に退職し、京都に出て円山派の森寛齋に画を学び、書を遠山慮山に学んだ。明治二七年二五歳の時に第三回日本青年絵画共進会で三等褒状を受け、翌年の第四回展でも三等褒状を受けた。明治二九年絵画協会第一回絵画共進会で二等褒状。明治三〇年絵画協会第二回絵画共進会で二等褒状。明治三一年絵画協会第五回絵画共進会で二等褒状、明治三二年第七回絵画共進会で二等褒状。明治三三年パリ万国博覧会に出品、明治三七年セントルイス万国博覧会出品。奉公していた塚本家からの支援もあり、画人・文人としてひとり立ちした。師譲りの円山四条派の描法で、写生を踏まえた風景画を追究し、国内各地を旅して風景をスケッチして絵手本を増やしていった。晩年は湖南の瀨

田川の清流を望む石山寺辺町に住み、俳諧三昧の生活を楽しんだという。

山元匡子（一八七五—一九五五）春挙の妻。旧姓名は生駒ため。春挙との結婚後「匡子」に改名。座談会では「未亡人」と表記される。春挙の又従姉弟にあたる。祖先是膳所藩医を務める家系であった。昼夜の別なく客が来訪し、弟子も起居する春挙宅をよく切り盛りした。

山元清秀（一九〇六—一九六）山元春挙長男。早くから父の画業継承は選択していなかったものの、早苗会の写生旅行には頻繁に同行して春挙門人たちと親しく行動を共にしている。なかでも早苗会の若手画家たちとは同世代とあって厚く親交を重ねており、春挙没後もしばしば蘆花浅水荘を訪ねてきた彼らとは、長く交流を続けていた。清秀自身は父の没後、参与として早苗会に関わっていたが、一九四三年二月、会長の川村曼舟が没したことで、早苗会が役員・会員の間で「存続如何を検討の処」、清秀と母匡子の連名により「この際、解散を希望する」と早苗会に申し入れたことにより、「師家の意見を重んじ五日同塾物故者追悼会を執行、故山元春挙の墓に詣で解散し」、四〇年余りにおよんだ山元画塾の歴史に幕を下ろすこととなった。なお、清秀はその後、京都大学理学部附属天津臨湖実験所の研究員を経て、大阪医科大学教養部教授として生物学（専門は浮遊生物「プランクトン」）の教鞭を取った。

川村曼舟（一八八〇—一九四二）京都出身。本名萬蔵。明治三一年に山元春挙に師事。古参門人の筆頭。同三三年の京都市新古美術

展に「春風」で入選、二等褒状受賞。同四一年、第二回文展に「黄昏」で初入選、三等賞受賞。「山村暮靄」「夕月」では連続三等賞、四四年、「高野山の夏」で褒状。大正三年第八回文展の《比叡山三題》、大正四年第九回文展の「竹生島」、同六年第一一回文展の「日本三景」で連続特選。同八年帝展審査員、同一三年、帝展委員。昭和六年に帝国美術院会員となる。

特選を重ねた画歴から、画壇における早苗会の塾頭格を務めた。作品は、第二回文展以降は、画壇活動の多忙もあり、春挙様式を踏まえつつ描き込みの多い運筆や描写は殆どみせず、おだやかな京名所や風景画をこなす仕事を中心となった。

林文塘（一八八二—一九六六）京都出身。本名幸三郎。初め前川文嶺に学び、後に山元春挙に師事する。早苗会では評議員となる一方、京都の日本画団体、後素協会会員も務めた。大正三年第八回文展に「樵」で初入選、褒状受賞。その後、入選を重ねるが、同八年に発足した帝展には、審査基準への疑問から離脱、鶴友らと日本自由画壇に参加。同展では、モダニズムとインド趣味を融合させたような仏画も手掛ける一方、京都や周辺の名勝の四季風景作品を定番出品した。木炭デッサンと見まがう筆触でカササギや樹木を描写した実験作や、俵屋宗達の著名な養源院杉戸絵唐獅子を近代日本画にリメイクした作品など、独自表現も行った。昭和一八年、川村曼舟が没し、早苗会の解散後は、同会有志で結成された耕人社に理事として参加した。

【注3】 熊野神社：現京都市左京区。丸太町通東大路北西角。

【注4】 丸柵：初代市田弥一郎（弥惣八、一八四三—一九〇六）の屋号。彦根油屋町の紙・荒物商「綿幸」の青山家二男。一三歳頃から商売に従事。二〇歳で商才を見込まれ旧五個荘町の市田弥惣右衛門の養嗣子となり「丸柵」を継ぐ。明治七年、東京に進出、京呉服卸問屋を開店、人形町で大店へと成長させた。同三〇年に家督を譲り、晩年は京都南禅寺に市田對龍山莊を営み、風月や芸術を愛した。

【注5】 神戸の楠公さん：神戸市中央区多門通に所在する湊川神社の通称。

【注6】 栗田郡：正しくは栗太郡。

【注7】 現大津市上田上桐生町。市の南東部、さらに奥へ入ると甲賀郡信楽町。

【注8】 「赤毛布をかふる位なら其頃皆平気でやってゐた」…かような出で立ちの人々は当時、「赤ゲット」と呼ばれていた。ゲットの呼称は、毛布「blanket」の略。明治初期、田舎から都会見物に来たおのぼりさんの団体旅行者は、はぐれないよう赤い毛布を羽織っていた。即ち「赤毛布」・「赤ゲット」は蔑視的なニュアンスを含む呼称である。春挙の父善三郎は、洛中の住人でありながら、あえて赤ゲットの出で立ちで近所を歩き回っていた。その挙動が奇異な彼の人格そのものであると神阪雪佳が例に出したのであったが。田中亀は、その点を理解しておらず、否定的な発言をしたのであった。余談だが、春挙の弟子の柴田晩葉はこの団体に好感を寄せて、たびたび作品を描いた。

【注9】 寛齋翁に預けられて間もない頃：明治一八年（一八八五）、一九歳。

【注10】 室町二條に転ぜられた当座：明治二六年（一八九三）、一二歳

【注11】そこに奥さんが来られた…明治二十七年（一八九四）、二三歳

【注12】席上…席画のこと。すなわち客の面前にて即席で書画の揮毫をすること。

【注13】蜀山人…太田南畝。幕臣。天明狂歌の代表的狂歌師

【注14】明治二十九年（一八九六）…二四歳。

【注15】無聊…ぶりよう。退屈なこと。

【注16】恁麼（いんも）…中国禅林で好んで用いられた連体詞。「このような」、「このよう」、「かくのごとく」と和訳される。唐代の禅僧南嶽懷讓（えいじょう）が六祖の慧能に参じた時、六祖が放った有名な問いに、「是れ什麼（なに）物か恁麼に来る」という言がある。即ち、儀礼的に「わざわざこんなとこまでわしを訪ねてきたのはどなたかな」と尋ねず、「これは何ものか、このように来たのは」と、まるで人ではない何かを見たような言い回しをして、禅としての返答を要求した問い。つまり、驚きや疑念のニュアンスが混じった「このような」である。宋代に至って俗語となる一方、日本には禅宗とともに伝わり、禅僧の間で用いられた。

【注17】花柳病（かりゅうびょう）…当時の性感染症の俗称。花柳界での感染が多かったことによる。社交的な人物の春挙は、花街にも出入りして遊興を重ねていた。

【注18】窒扶斯…腸チフスと思われる。

【注19】宝丹…アントニウス・コ・ボードウィン（一八二〇—一八五。オランダ出身の軍医。長崎養生所教頭、大阪府仮学校・大阪陸軍病院・大学東校で教鞭をとり帰国）が日本に持ってきた健胃剤の処方が日

本人に伝授され、守田治兵衛商店が独自の改良を加えて、東アジア一帯に普及した胃腸薬。太田胃散とともに当時流行した。

【注20】第二夜の出席者（語り手）人物解説

玉舎春輝（たまやしゅんき。一八八〇—一九四八）岐阜県大野郡清見村下切（現在の高山市上枝町）に生まれる。旧姓清水、名は秀次。一歳時、吉城郡古川村（現飛騨市）の玉舎家の養子となる。明治三二年、京都に出て原在泉に入門。翌年、山元春挙に師事する。同四二年、第三回文展に初入選。以後、文展を舞台に活躍するが、大正八年、帝国美術院が設置され、文展が帝展に改組されると日本自由画壇の結成に参加、同人となり、官展に対抗して自由画壇展で発表を行う。早苗会では継続して塾展に出品。昭和三年、御大典の主基御屏風を春挙が揮毫した際は、植中直斎とともに助手を務めた。

川畑春翠（一八九一—？）明治二四年福岡市に出生。京都美術工芸学校を卒業。丙午画会の同人となり、作品を発表。丙午画会展を毎回訪れていた春挙に認められて入門。早苗会では春挙と距離が近く、山岳会の委員に指名される。作品は春挙風をアレンジした人物画や風景画などを手掛ける。『京都名勝と畫家 全』では（注略）第九回文展に林和靖、以後天地境又は琵琶湖、尚ほ高山四題等の諸作が入选してその恵まれた天分は調子の好い躍進がつけられた。氏は有名な旅行家であり山岳家であり、然も極めて顕著な独自性に富む芸術家で、先年印度渡航、彼地芸術の研究等其の態度熾烈を認められた新進有爲の作家である。」と紹介される。

岡文濤（おかぶんとう。一八七六一―一九四三）丹後國府中村一宮（現宮津市）の出身。本名濤三。実家は代々籠神社の神主として名門高い郷家。師範学校卒業後、京都市立美術工芸学校絵画科に入り特待生の優遇を受けた後、明治三四年卒業。同年、山元春挙に師事。同攻会幹事を務め、早苗会展では図録編集者を務める。絵画共進会、博覧会等で受賞を重ね、母校東苑会幹事もつとめ、後素協会会員となる。明治四四年第五回文展に《杉垣》で初入選。大正三年第八回文展に《梅雨の頃》、四年第九回文展に《スリチビ》で入選する。写生画様式の花鳥画の出品に始まるも仏画も手がけ、第三〇回早苗会展で文人画（南画）に転じる。昭和九年には、近作六〇点余りを京都美術倶楽部にて展示した「岡文濤南画展」（二月二五開幕）を開催。

西井敬岳（一八八〇―一九三七）山元春挙門人。本名敬次郎。福井出身。明治三五年、京都に出で山元春挙に師事、春挙の書生を務めた。春挙の本宅では玄関部屋に住み込み、使いや連絡要員として奔走しており、春挙及び家人のことを最も身近で知る一人であった。文展には計八回の入選に及んだが、大正八年、同門の庄田鶴友や林又塘、植中直斎ら同志と共に日本自由画壇を結成、同会の展示に出品したものの、早苗会にも復帰して評議員に収まっている。皇后宮御用品に御買上される荣誉にも浴している。

案本一洋（まつもといちよう。一八九三―一九五二）京都市出身。本名謹之助。明治四五年京都市立美術工芸学校を卒業。大正四年、京都市立絵画専門学校を卒業後、山元春挙に師事。同年第九回文

展「壬生狂言の楽屋」で初入選、翌年以降も入選を重ねる。同時期の早苗会では、油彩画風に異国の女性を描いた「占」や、樹下の暗闇で豊満な女性が水浴びするエロチックな美人画を出品している。昭和二年第八回帝展に「蟬丸」、翌三年第九回帝展に「饑春」を出品し連続して特選となる。昭和初期以降は、王朝風の人物画へと方向転換し、近代における復古大和絵的な作品を発表し続けた。同四年、帝展推薦。同八年の春挙没後は川村曼舟に師事。同年第一四回帝展で初の審査員。また、京都市立絵画専門学校の教授にも就任している。戦後は日展で審査員をつとめ、同二五年日展運営会参事となる。

中村春楊（一八九一―一九三七）山元春挙門人。本名新太郎。自宅は京都市右京区太秦。明治四〇年、一六歳で春挙に師事。大正七年（一九一八）第一二回文展に《朝あらし》で初入選し、翌年以降の帝展では入選計九回に及んだ。早苗会でも中堅画家の位置に収まり、座談会に招集されたものの、その後まもなくして発病。長きに渡る闘病の末、昭和二年、四六歳にして世を去った。

【注21】《山二題》…大正五年、第一〇回文展出品作。

【注22】お池…「御池通」のこと。明治三三年頃、春挙宅は御池通堺町に所在していた。

【注23】島々（しましま）…安曇村の中心集落。大正・昭和初期においては、上高地・北アルプス登山の玄関口だった

【注24】矢立…「矢立」とは江戸時代の旅人等に重宝された携帯筆入れケース。胴部のヒンジ式の蓋で開閉する構造が多い。蓋に墨が装着され

ている形式も多い。

【注25】 中立売時代…この下りの年代は要調査。油絵を盛んに描いた時期と関係する。

【注26】 有楽館…明治期に廃寺となった織田長益（号…有楽）創建になる建仁寺塔頭正伝院が、美術倶楽部的な活動の施設として供された由緒ある建築。

【注27】 半切…画仙紙の全紙を縦半分にはり断したサイズ（判型）

【注28】 床几…ここでは、町家の店先に取り付けられた開閉式のバツタリ床几のこと。

【注29】 京日…京都日出新聞

【注30】 五回博…第五回内国勸業博覧会のことか。

【注31】 荒村暮靄…速記者の誤記である。ただし「江村暮靄」

【注32】 第三夜の出席者（語り手） 人物解説

中島春鷗（一八八七—？） 山元春挙門人。愛知県出身。名は伝次郎。

はじめ名古屋の小寺雲洞に師事。後に京都へ移り春挙に師事した。

文展・帝展に多数入選。大毎展、他受賞多数。京都に住むが、戦

後名古屋へ戻る。山水が得意で中京画壇の代表画家の一人であっ

た。中部聯盟委員

村瀬秀月（一八八五—？） 山元春挙門人。日本画家。明治一八年、

岐阜県安八郡牧村に生れる。斐川・漁逸の号あり。初め大熊秀齋

に就き、後、山元春挙に師事。動物・人物画を中心に手掛ける。

明治四〇年京都美術協会に虎の図を出品して三等銅牌受賞。明治

四一年同会に「和楽の図」を出品して同賞を受け、同四四年選画

会に「虎及び得度式の図」を出品して三等賞牌を受ける。第二回文部省美術展覧会に虎の図を出品、入選する。帝国絵画協会。選画会。美術研精会の会員。のち、東京下谷区に移住。

植中直斎（うえなかちよくさい。一八八五—一九七七）本名、直治郎。奈良市花芝町の出身。明治三〇年頃、大阪の四条派画家、深田直城に入門。同三八年、東京に移住し橋本雅邦に師事。同四〇年、東京勸業博覧会に「念踊之図」で二等賞牌を受け、また第一回文展に「落日」を出品し三等賞受賞。まもなく重い病にかかるが、それを新聞で知った田中智学が支援を申し出て直斎は智学に入門。要山師子王文庫にあつて『妙宗』の絵画記者となる。翌年、療養のため関西へ戻り、四五年に山元春挙に師事。大正四年の第九回文展に「得意」で再度入選し、以後入選を重ねるが、官展への反発から鶴友、敬岳、文塘らとともに日本自由画壇へ合流。一五年に官展に復帰し、昭和七年には帝展推薦となる。彼が手掛ける画題は人物画がほとんどだが、風俗人物もあれば歴史人物もあり、モダンな作風から中世絵巻さながらの人物描写まで画域の幅広さをみせた。

久保田竹文（一八七八—？） 山元春挙門人。名は信之助、明治十一年三月京都に生れる。はじめ森川あつている。『竹文画集』、『竹文花鳥画譜』、『四季楽園』等の著書有り。

古谷一晁（一八九〇—一九六六） 明治三三年八月、京都に生まれる。

本名藤三。同四二年、京都市立美術工芸学校絵画科を卒業。同四五年に京都市立絵画専門学校を第二期生として卒業後は研究科

に進級。修了後、山元春挙に師事する。在学中の四二年第三回文展に《花屋の庭》で初入選、褒状を受け、翌四三年にも文展に入選しており、華やかな実績をかかえた俊英としての早苗会入塾であった。帝展入選も順調に重ねている。画法は、正統派の春挙風写生画法を継承しつつ、人物画に独自の画境を築き、《岩窟羅漢図》におけるイルージョン的な運筆表現のほかに、中国満州族の子供を描いた作品など、一風変わった題材を取り上げる。昭和四一年歿。

小村大雲（おむらたいうん。一八八三―一九三八）島根県出身。本名権三郎。明治三三年京都に出て、最初森川曾文に、翌年都路華香に学び、同三六年山元春挙に師事。同年の第五回内国勸業博覧会に「順逆離合」を出品、褒状を受ける。大正元年第六回文展で初入選、三等賞を受賞。翌二年から四年まで三回連続三等賞を受賞。五年第一〇回文展に「画舫」、六年第一一回文展に「神風」で連続特選。同八年の第一回帝展では推薦となり、一三年帝展委員となる。昭和八年第一四回帝展まで出品した。作品は人物画が中心であり、高い気風をたもちつつ、創造性あふれる構図や表現の工夫をみせる。松平不昧のご当地雲洲の出身者として茶道に対する取り組みは人一倍であり、『都市と芸術』山元春挙先生追悼号では、春挙の茶の嗜み方や道具について評している。

三宅鳳白（みやけこうはく。一八九三―一九五七）京都市に生まれる。本名清一。父は日本画家三宅呉暁。鳳白も大正中期までは「呉月」と号していた。明治四五年京都市立美術工芸学校、大正四年京都市立絵画専門学校を卒業。研究科に進級し、岡本神草らの密

栗会に参加。陸軍に志願入隊し、同七年第一二回文展で初入選の「演習所見」に結実。同一四年第六回帝展で「おはらめ」入選。以後、帝展入選を重ねる。春挙への入門は同一五年と遅く、すでに彼の扱う主題も固定化されていた。歌舞伎、能、京劇と、和漢を問わず、演劇・舞踊系を描くことが彼の画業であった。昭和五年第一回帝展では「花旦」が特選。前年の第三〇回早苗会展に出品した同趣向の「崑曲」を画塾での講評によって軌道修正したものと思われ、画塾展と官展の関係を物語る。昭和一一年、絵専校助教授となり、戦後は光華女子短期大学教授を勤めた。

庄田鶴友（一八七九―一九四八）明治一二年、奈良県柳生の出身。本名常喜。同一八年、京都に移住。日露戦争への従軍を経て同三一年京都市立美術工芸学校を卒業。山元春挙に師事。同三六年第五回内国勸業博覧会で褒状。同四〇年第一回文展入選。以後文展入選を重ね五回褒状を受ける。数多くの春挙門人の中でも、厳格に春挙風写生画様式を継承し、かつ雄大に展開させた門人が鶴友である。春挙も画風継承者と認めていたのか、膳所に住む姪を鶴友に嫁がせている。明治四三年京都市立絵画専門学校の助教諭となり、のち教授として後進の指導にあたる。なお、大正八年には、林文塘らと日本自由画壇を結成し、官展から離脱。昭和六年、自由画壇を脱退して官展に復帰した。その間、古参役員として早苗会展への出品も継続、重きをなした。

【注33】観音像を安置した提厨子（さげずし）…昭和一六年に発行された『蘆花浅水』（早苗会編。春挙遺愛の竹茶器・竹道具類を集成し

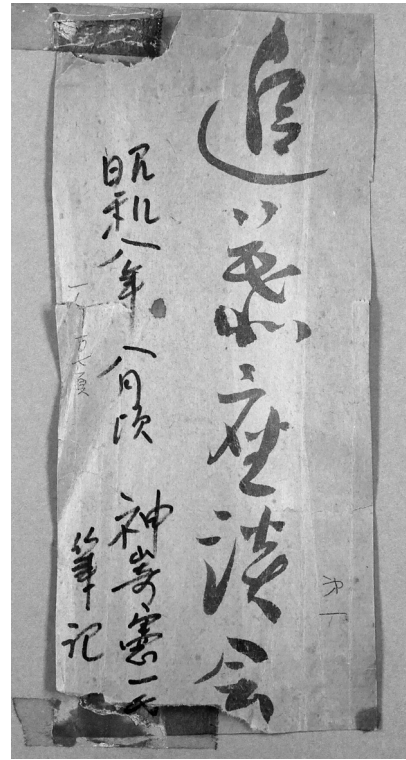
た図録にして春拳狂歌集)の冒頭近くに「一器六能」と共に掲載される「天然竹 提厨子 銘素心」がそれであろう。二頁後には、この提厨子に収まる小像の自刻聖観音坐像も掲載される。

【注34】暹羅(しゃむろ)・タイ王国の古称。「スイヤム、ヘシヤム、またはシヤムローともいふ。漢に暹羅と訳す。これ也」古の時、暹と、羅斛と、二国あり」(『西洋紀聞』中巻 一七二五頃)

【注35】四ツ版の美濃・美濃紙全紙の四つ切り判サイズ(判型)のこと。

【注36】室咲の花・「室咲」(むろざき)とは、温室で春や夏の花を冬に咲かせること。

四、図版編



[1]



[2]



[3]

(5)

高田善右衛門の回線になる。のてす。

村松——文章さんとは神楽部北五郎の字を  
 村の人で文章さんの名も、その出たのた。お  
 天さんほ山元善三郎と言はれた。先生は子供  
 の時か、短か好まされた。 文章さん

徳力——三回内海勸業博覧会に、  
 二尺五寸巾に、茶室の意を、出た。村松  
 文章さんと一踏に東京近辺に行つたが、其時  
 文章さん、村松さんの家は泊まられた。

村松——文章さんの名を見ても、  
 10x20

[5]

(4)

村松——所て文章さんには、  
 翁と云ふ事、た。文章と  
 云ふ翁は文章さんにつけて、  
 と文章人から言ひたるがある。文章翁は、  
 され、村松、文章さんが、  
 は、つて文章に行つた時、  
 水たつて、改めて入門したと云ふ、  
 なく、墨紙、  
 未亡人——  
 10x20

[4]

(7)

てられぬので、  
 洋全で突けと言はれる。とんちを  
 番人に叱られると言ふと、叱られるのは、  
 前也、と自分です。第一、  
 りして怒り立つた。夫れを大急ぎで、  
 ね。勿強番人に叱られた。

村松——山元と云ふ姓は、  
 出た来たので、  
 未亡人——  
 10x20

[7]

(6)

田中——丸餅(市田)か、  
 描かんたらん事になつたが、  
 願つてゐる処、  
 はん、  
 居ると云ふ事、  
 之と、  
 10x20

[6]

(9)

善三郎  
うんは

勝平は山をと言ふ名にかゝ、終には山を言  
ふと二つ張けて名前の村にしてゐられた。  
村松——八日市の傍に尾屋寺村と言ふ村が  
ある。そこには山といふ寺がある。か  
この山寺に幾つ位の事か暫く行つてゐるが  
禪とやらはあつた。氣分が大分常人と  
変つた。二休と言ふ事か、けつてゐるが、  
うまくて田舎の位打たれた。夏か  
川村——徳島の平は都立か悪くあると

10x20

[9]

(8)

(いんげ)と言つてゐる。たゞ書いてゐる。ま  
田中尾——徳島の村松の村があつて、  
名古屋あたりの徳島から夫れといふ。徳島  
いづくれと頼ま、私か頼みに、春平さんに  
世間へ行つたのたか、どうしていやくと言  
つて描かれぬ。それを何つち描いて欲し  
言つて別頭、三日目に描いた事かある。  
村松——善三郎の父文さんの善三郎と言ふ人  
は善右衛門といふ人の節で、  
未元人——徳島生駒と言つてゐる。たゞ

10x20

[8]

(11)

善三郎

どんか、自分の土耳吉帽に浴して日向に乾か  
してゐられる。そして御本人は平気な顔して  
ゐられる。つて挨拶のしやうか、たと言ふ  
うた。  
徳力——洋服着て高下駄穿いてゐる。たの  
を言ふと。  
村松——その腰に腰刀を差してゐる。たの  
たか、一何れやら、狂人か、狂人かと言ふ  
た。たか、たか、たか、たか、たか、たか、  
未元人——立身帽子をかぶつてゐる。たか、

10x20

[11]

(10)

徳島生駒はたゞたか、たか、たか、  
村松——徳島一何れやら、狂人か、狂人か、  
言つてゐる。たか、二何れやら、狂人か、  
言つてゐる。たか、  
村松——善三郎の父文さんの善三郎と言ふ人  
は善右衛門といふ人の節で、  
未元人——徳島生駒と言つてゐる。たゞ

10x20

[10]



(15)

田舎の道が云々思、夫れがけの着るまゝの十人  
 かくの人が一帯に集りて入るが如き  
 いゆまゝで……  
 村松——夫れを……  
 か足の方後で……  
 けの有り……  
 功に出ると……

先づは……  
 ち……  
 先づは……

10x20

[17]

(16)

の深め……  
 着て……  
 たの……  
 て……  
 る……  
 の……  
 ち……  
 妻人……

10x20

[16]

(17)

二……  
 くる……  
 神……  
 か……  
 中……  
 視……  
 の……  
 する……  
 け……  
 村松……

10x20

[19]

(18)

何……  
 ち……  
 つ……  
 便……  
 中……  
 神……  
 見……  
 村松……  
 ち……  
 ち……

10x20

[18]

(21)

讀、たうとたるかある。  
 村松——春華おもしろく遊ばは出ようねか  
 居るの留守での構はたに上り込まのれし  
 来乞人——三月三日おは留守たしとかう  
 と云ふので二階で寝てると、そこは村松  
 さんやう三人連れか上りおぼつて酒盛りか  
 あり、<sup>10x20</sup> 酒盛りはあつておぼつて酒盛りか。その  
 後、<sup>10x20</sup> 酒盛りの主人は酒盛りか。

[21]

(20)

と思つたんや。そすと今の頼まりと云ふ説や  
 の春華さんは布海苔の祥で比喩や、其お家  
 さん薄に世すお菓子か三粒死。  
 X X ——先生と云ふは御親叔と云ふ事て  
 しはが、<sup>10x20</sup> 先生と云ふは御親叔と云ふ事て  
 来乞人——<sup>10x20</sup> 先生と云ふは御親叔と云ふ事て  
 西陣園士の画従兄弟に成りまふ。  
 村松——<sup>10x20</sup> 先生と云ふは御親叔と云ふ事て  
 より、<sup>10x20</sup> 先生と云ふは御親叔と云ふ事て  
 花札らおに、<sup>10x20</sup> 先生と云ふは御親叔と云ふ事て

[20]

(23)

神松——<sup>10x20</sup> 先生と云ふは御親叔と云ふ事て  
 来乞人——<sup>10x20</sup> 先生と云ふは御親叔と云ふ事て  
 村松——<sup>10x20</sup> 先生と云ふは御親叔と云ふ事て  
 其れは使ひか来ると其返るや狂歌ややるの  
 て、<sup>10x20</sup> 先生と云ふは御親叔と云ふ事て  
 話つて返る子かお元かお元かお元かお元か  
 のお元か、<sup>10x20</sup> 先生と云ふは御親叔と云ふ事て  
 た。今、<sup>10x20</sup> 先生と云ふは御親叔と云ふ事て  
 くるお元か、<sup>10x20</sup> 先生と云ふは御親叔と云ふ事て

[23]

(22)

降りる説に行かぬ。然しおの博らぬと降  
 リて行くと、あう一杯飲め、矢ッ張らぬと降  
 たらんか、と云うお博らぬと降たらんか、  
 らんか、と云うお博らぬと降たらんか、  
 村松——<sup>10x20</sup> 先生と云ふは御親叔と云ふ事て  
 った。お博らぬと降たらんか、と云うお博らぬと降  
 たらんか、と云うお博らぬと降たらんか、  
 けとせたらぬか、と云うお博らぬと降たらんか、  
 今、<sup>10x20</sup> 先生と云ふは御親叔と云ふ事て  
 一回は、<sup>10x20</sup> 先生と云ふは御親叔と云ふ事て

[22]







旅中徒然の脚

(36)
明日は、東京まで行く予定だ。
紅葉の季節、夫は自らの病を
お伴した。
紅葉の季節、夫は自らの病を
お伴した。

[36]

(37)
紅葉の季節、夫は自らの病を
お伴した。
紅葉の季節、夫は自らの病を
お伴した。

[37]

(38)
明日は、東京まで行く予定だ。
紅葉の季節、夫は自らの病を
お伴した。
紅葉の季節、夫は自らの病を
お伴した。

[38]

(39)
明日は、東京まで行く予定だ。
紅葉の季節、夫は自らの病を
お伴した。
紅葉の季節、夫は自らの病を
お伴した。

[39]

( 41 )

此の男は吃驚してしまつて、  
 職多に言われぬ  
 と云ふ氣を持ち、  
 何れか  
 此の男は吃驚してしまつて、  
 職多に言われぬ  
 と云ふ氣を持ち、  
 何れか  
 此の男は吃驚してしまつて、  
 職多に言われぬ  
 と云ふ氣を持ち、  
 何れか

[41]

( 40 )

左の多きは古きと云ふ言ひ、  
 夫れと知る  
 のやしと親切に  
 此の印を付けてお尋ね  
 の家の女子は  
 此の男は吃驚してしまつて、  
 職多に言われぬ  
 と云ふ氣を持ち、  
 何れか

[40]

( 43 )

此の男は吃驚してしまつて、  
 職多に言われぬ  
 と云ふ氣を持ち、  
 何れか  
 此の男は吃驚してしまつて、  
 職多に言われぬ  
 と云ふ氣を持ち、  
 何れか  
 此の男は吃驚してしまつて、  
 職多に言われぬ  
 と云ふ氣を持ち、  
 何れか

[43]

( 42 )

此の男は吃驚してしまつて、  
 職多に言われぬ  
 と云ふ氣を持ち、  
 何れか  
 此の男は吃驚してしまつて、  
 職多に言われぬ  
 と云ふ氣を持ち、  
 何れか  
 此の男は吃驚してしまつて、  
 職多に言われぬ  
 と云ふ氣を持ち、  
 何れか

[42]



( 49 )

金を借りて借りて借りたくつて、借りた金の  
 出費を言はれぬくた程で、金を借りるるに  
 掛つてゐた。  
 林一夫が三人共、大成功の収め取  
 した。

田中義一 高田の家の奥の部屋に、  
 さねとあるのて、何十部かかして、  
 来た。さうとも、たんに、  
 てるのに、先生は、  
 やと言ふ、  
 10x20

[49]

( 48 )

金を借りて借りて借りたくつて、借りた金の  
 出費を言はれぬくた程で、金を借りるるに  
 掛つてゐた。  
 林一夫が三人共、大成功の収め取  
 した。

田中義一 高田の家の奥の部屋に、  
 さねとあるのて、何十部かかして、  
 来た。さうとも、たんに、  
 てるのに、先生は、  
 やと言ふ、  
 10x20

[48]

( 51 )

金を借りて借りて借りたくつて、借りた金の  
 出費を言はれぬくた程で、金を借りるるに  
 掛つてゐた。  
 林一夫が三人共、大成功の収め取  
 した。

田中義一 高田の家の奥の部屋に、  
 さねとあるのて、何十部かかして、  
 来た。さうとも、たんに、  
 てるのに、先生は、  
 やと言ふ、  
 10x20

[51]

( 50 )

金を借りて借りて借りたくつて、借りた金の  
 出費を言はれぬくた程で、金を借りるるに  
 掛つてゐた。  
 林一夫が三人共、大成功の収め取  
 した。

田中義一 高田の家の奥の部屋に、  
 さねとあるのて、何十部かかして、  
 来た。さうとも、たんに、  
 てるのに、先生は、  
 やと言ふ、  
 10x20

[50]







病氣に神経質

(68) 田中 中島有亭がよく手帳にまてゐるが、実は頭痛が来たまてゐたのね。  
田中 田中先生が終言ふてゐるね、其等は知りやう、解が読めたか、解が好まう、かなり指いたので他の言葉を使ふよ  
り、解にいたかよからう、と云ふので、解にいたのね、と。私が読まねたから、と  
二かとうと云ふて別は悪い知もなかつたが、総解には悪弱な方があつた。幾分位から、うたか腹に悪い物が出来て、患者がうたか言

10x20

[68]

(69)

ふと歸り感に、なまのなで、困つたやうな  
体びると一息いかと、案じてゐる。別に痛くも  
ないし、時には痒つて、いゝも、痒るやうある  
のな、たか、風邪引かれたり、腹を悪くされ  
りした時、そのな、と一筋に投薬してゐる。  
之れが、~~田中先生が~~田中先生が、四十位に  
なつてから、大分肥えて来たね、夫れと、同位  
にいつと、なまなくなくなつて来たのね、腹  
くつて、なまのなまのなまのなまのなまのな  
奇蹟と云ふ程、なまのなまのなまのなまのなま

10x20

[69]

(70)

と云ふと、先生はすいに、さうかと言つて、薬を  
飲ませる。さうと、山かすく、あと、又、  
柳樹や、たか、と、人たか、何まか、海で  
もよくない、なまのなまのなまのなまのなまの  
胃腸や、なまのなまのなまのなまのなまのな  
配してゐるのね。  
田中 田中先生が、先生が、先生が、先生が、  
田中 田中先生が、先生が、先生が、先生が、  
柳樹や、たか、と、人たか、何まか、海で

10x20

[70]

(71)

田中 田中先生が、先生が、先生が、先生が、  
柳樹や、たか、と、人たか、何まか、海で  
もよくない、なまのなまのなまのなまのなまの  
胃腸や、なまのなまのなまのなまのなまのな  
配してゐるのね。  
田中 田中先生が、先生が、先生が、先生が、  
田中 田中先生が、先生が、先生が、先生が、  
柳樹や、たか、と、人たか、何まか、海で

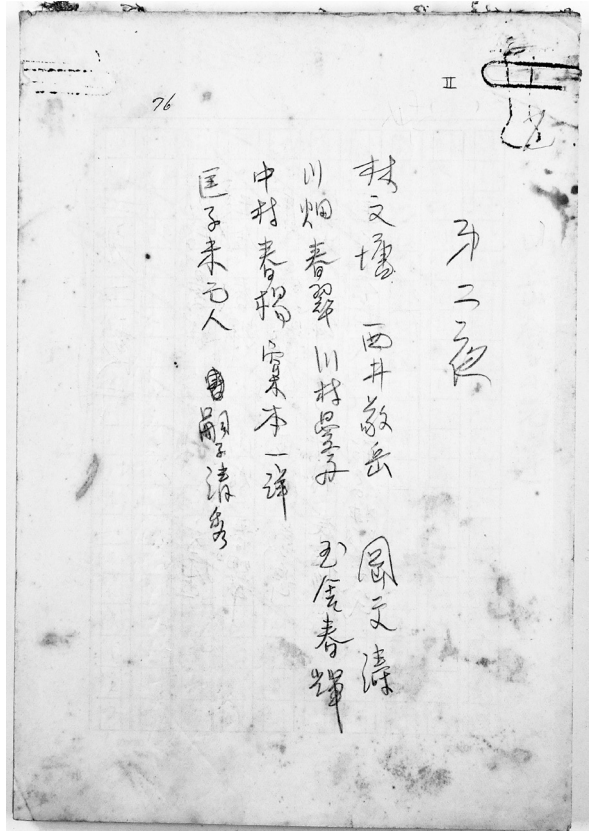
10x20

[71]

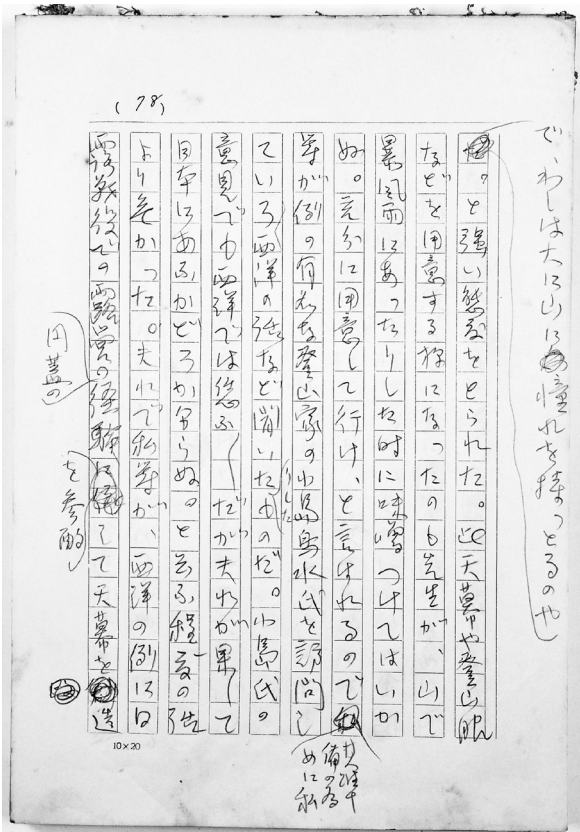




[(76-77 間)]



[76]



[78]



[77]



(84)

申おし、えらいあらしかやうと来たせ、

白馬山の上の嵐

ふきの穂はゆきを待って、あらしは来ぬとわづらひぬ。  
 雪水をはくた、大い木柱は、雪か、雪生れし、  
 ちみせると、頭割し、雪の穂を、雪してしまつた。  
 雪て、雪を、雪か、雪い、雪い、雪い、雪い、雪い、雪い、  
 とてゆえ、りい、ふき、やと、一人、心、な、ん、て、る、の、  
 ち、大、け、り、り、大、か、い、か、れ、り、し、ち、る、か、あ、つ、の、  
 白、馬、の、山、の、上、の、嵐、は、今、用、の、い、な、る、雪、深、に、雪、り、か、  
 け、た、に、て、ゆ、め、て、雪、を、雪、く、た、な、つ、た、に、雪、こ、  
 に、雪、を、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、  
 10x20

[84]

(83)

ふきの穂はゆきを待って、あらしは来ぬとわづらひぬ。  
 雪水をはくた、大い木柱は、雪か、雪生れし、  
 ちみせると、頭割し、雪の穂を、雪してしまつた。  
 雪て、雪を、雪か、雪い、雪い、雪い、雪い、雪い、雪い、  
 とてゆえ、りい、ふき、やと、一人、心、な、ん、て、る、の、  
 ち、大、け、り、り、大、か、い、か、れ、り、し、ち、る、か、あ、つ、の、  
 白、馬、の、山、の、上、の、嵐、は、今、用、の、い、な、る、雪、深、に、雪、り、か、  
 け、た、に、て、ゆ、め、て、雪、を、雪、く、た、な、つ、た、に、雪、こ、  
 に、雪、を、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、  
 10x20

[83]

(86)

申おし、えらいあらしかやうと来たせ、

白馬山の上の嵐

ふきの穂はゆきを待って、あらしは来ぬとわづらひぬ。  
 雪水をはくた、大い木柱は、雪か、雪生れし、  
 ちみせると、頭割し、雪の穂を、雪してしまつた。  
 雪て、雪を、雪か、雪い、雪い、雪い、雪い、雪い、雪い、  
 とてゆえ、りい、ふき、やと、一人、心、な、ん、て、る、の、  
 ち、大、け、り、り、大、か、い、か、れ、り、し、ち、る、か、あ、つ、の、  
 白、馬、の、山、の、上、の、嵐、は、今、用、の、い、な、る、雪、深、に、雪、り、か、  
 け、た、に、て、ゆ、め、て、雪、を、雪、く、た、な、つ、た、に、雪、こ、  
 に、雪、を、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、  
 10x20

[86]

(85)

ふきの穂はゆきを待って、あらしは来ぬとわづらひぬ。  
 雪水をはくた、大い木柱は、雪か、雪生れし、  
 ちみせると、頭割し、雪の穂を、雪してしまつた。  
 雪て、雪を、雪か、雪い、雪い、雪い、雪い、雪い、雪い、  
 とてゆえ、りい、ふき、やと、一人、心、な、ん、て、る、の、  
 ち、大、け、り、り、大、か、い、か、れ、り、し、ち、る、か、あ、つ、の、  
 白、馬、の、山、の、上、の、嵐、は、今、用、の、い、な、る、雪、深、に、雪、り、か、  
 け、た、に、て、ゆ、め、て、雪、を、雪、く、た、な、つ、た、に、雪、こ、  
 に、雪、を、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、雪、こ、  
 10x20

[85]





( 96 )

〇、先生は赤ひねり（白ひねり）白羽下りな  
 し、以名かたやと物づくはあまううの飛鶴。  
 才い物まをくれとまはれおのり（おまけ付くと、  
 名は先生）はゆるたふあまうた。  
 西井—先生の夏生板は先生創案の巻紙式  
 にもある式はなつておた。以創案は大行直  
 いるた。何れもお地はるそれの段、春訂書と  
 二人であ、ひねりないころ、ちねり物づくは  
 つるらあ、まはれや」とあま、あまうた  
 ねた。

10x20

[96]

( 95 )

〇、先生は赤ひねり（白ひねり）白羽下りな  
 し、以名かたやと物づくはあまううの飛鶴。  
 才い物まをくれとまはれおのり（おまけ付くと、  
 名は先生）はゆるたふあまうた。  
 西井—先生の夏生板は先生創案の巻紙式  
 にもある式はなつておた。以創案は大行直  
 いるた。何れもお地はるそれの段、春訂書と  
 二人であ、ひねりないころ、ちねり物づくは  
 つるらあ、まはれや」とあま、あまうた  
 ねた。

10x20

[95]

( 98 )

〇、先生は赤ひねり（白ひねり）白羽下りな  
 し、以名かたやと物づくはあまううの飛鶴。  
 才い物まをくれとまはれおのり（おまけ付くと、  
 名は先生）はゆるたふあまうた。  
 西井—先生の夏生板は先生創案の巻紙式  
 にもある式はなつておた。以創案は大行直  
 いるた。何れもお地はるそれの段、春訂書と  
 二人であ、ひねりないころ、ちねり物づくは  
 つるらあ、まはれや」とあま、あまうた  
 ねた。

10x20

[98]

( 97 )

〇、先生は赤ひねり（白ひねり）白羽下りな  
 し、以名かたやと物づくはあまううの飛鶴。  
 才い物まをくれとまはれおのり（おまけ付くと、  
 名は先生）はゆるたふあまうた。  
 西井—先生の夏生板は先生創案の巻紙式  
 にもある式はなつておた。以創案は大行直  
 いるた。何れもお地はるそれの段、春訂書と  
 二人であ、ひねりないころ、ちねり物づくは  
 つるらあ、まはれや」とあま、あまうた  
 ねた。

10x20

[97]







(112)

る福はに師匠がわが(と身は)にまられたりに  
 は(念)深きせられた。  
 川畑十一大ら二年に受けて、藤原流と(て先  
 生は)受けた(た)中が(比)留入(した)た。その(中)中(や  
 千種)揮毫、廿三(年)秋、(小)川(千)種、(久)保(井)翠、(藤)原、  
 秦(下)比(平)、(平)井(梅)仙(等)が(一)種(に)な(つ)て(一)内(午)会  
 を(組)纏(し)、(隔)月(に)展(覧)之(会)を(開)いた(が)、(分)員(迄)有  
 生(の)集(り)た(つ)た(の)で(本)書(に)出(す)葉(子)が(無)い。  
 この(次)先生(は)引(引)く(と)二(回)回(見)に(来)ら(れ)た。(と  
 才(と)千(種)君(が)大(志)が(七)葉(子)を(愛)し(に)行(く)。之

10x20

[112]

(111)

平(と)される(程)にな(つ)て、夫(れ)が(か)木(と)大(松)出  
 され(た)。元(来)が(正)月(に)留(遊)人(で)し(ま)ふ(か)ら(と  
 云(ふ)の)で(始)め(ら)れ(た)の)に(つ)た(の)か(た)お(た)ん(と)  
 は(高)井(梅)溪、(小)野(青)翠、(山)路(梅)村、(若)田(春)香、  
 (若)村(春)圃、(藤)田(梅)村、(井)原(松)雪、(平)田(秋)徳、(木)村  
 (春)圃、(一)種(に)正(気)、(小)川(破)斎、(庄)田(修)友(の)諸(君  
 だ(つ)た(が)、(小)野(君)は(経)典(が)勿(疎)な(い)先(生)と  
 な(し)と(受)け(よ)う(た)。  
 正(氣)一(種)の(入)塾(一)た(二)年(後)、丁(亥)大(改)の  
 博(覧)會(が)行(な)つ(た)が、(僅)か(室)扶(斯)で(展)覧(は)ん(び

10x20

[111]

(114)

川畑十一(二)年(会)を(解)散(する)時、(千)種(君)由(は)  
 舟(中)會(は)為(水)ぬ(と)言(ひ)、(僅)か(山)元(芝)生(の)外(に)  
 併(ぐ)と(相)傳(へ)した。  
 未(之)く(一)室(町)を(大)所(代)也(と)思(ふ)。而(も)一  
 畑(で)と(れ)た(と)云(ふ)然(る)子(を)世(間)で(飼)つ(て)お(た)  
 り(か)ある。氣(味)の(し)、時(は)可(愛)い、の(た)が、  
 何(か)え(は)入(ら)ぬ(子)が(あ)り(て)わ(さ)す(と)知(つ)て(す  
 ぐ(瓜)を(立)てる(の)に(付)け(は)は(ら)した。牛(乳)で(言)て、  
 み(ち)が、人(馬)より(然)る(子)の(二)月(か)は(と)飲(む)。  
 何(で)も(三)回(月)倍(み)た(梅)は(思)ふ。之(の)後(誰)か

10x20

[114]

(113)

の(葉)子(を)先生(は)よく(知)つ(て)お(ら)れ(て)、一(葉)な  
 る(と)、(博)覧(會)に(葉)子(を)出(さ)ぬ(で)も(え)い(や)な(い  
 か)と(言)は(れ)た(梅)圃(の)こ(と)ハ(ッ)と(一)種(が)あ(る)。  
 兩(年)會(は)千(種)君(が)竹(村)會(の)統(主)の(研)究(會)の(時)松  
 葉(さん)の(繪)を(見)せ(ろ)く(と)言(つ)た(梅)圃(松)風(芝)生  
 (の)種(を)め(ら)れ(た)子(が)何(か)や(る)氣(に)な(つ)て(る)知  
 り、(僕)等(の)中(中)が(芝)校(を)出(た)後(藤)原(の)由(は)  
 (と)一(種)は(な)つ(て)お(ら)れ(た)の)だ。(の)で(夫(れ))  
 梅(十)山(元)芝(生)を(ち)よ(つ)て(し)た(展)覧(會)に(は)  
 中、(葉)内(が)あ(る)と(知)る(行)わ(れ)た。  
 (是)に

10x20

[113]

(116)

して廻つてゐられるわう。

川村 — 吾が降るとまぐさ掛けられた。

未之六 — 徳野内、二条高野の山笠(国)と  
吾が降ると何処か、ら家はは出舞けられた。

徳野の内は、大正十一年のころからわう。

寫真は二十歳位から始められたらう。

か来た時は、靴も大きな暗黒が揃えてあつた。

林 — 中三郎(時)には本前があつて其中に  
梅蔵が一掃(ま)つてゐた。いろくな梅蔵を

10x20

[116]

(115)

に上げられたか、夫れか、いんち順序でわが  
木下大蔵、お側近に飼はれたと云ふ話も  
あつて、高し出せやと云ふ話もある。わ  
あ、頃の(梅)梅蔵あつた、よく先生に行かた  
か、一掃の降る(梅)梅蔵あつた、早くわが順序の  
と一掃に出舞するのには、お糸当を返る降かた  
いので梅野の草屋に懸んで懸し立ての男のい  
を比留(梅)梅蔵代りに持つて出舞けられた。こ  
た、も、室町九代(梅)梅蔵の子だ。

西井 — 京都の(梅)梅蔵何処へも先生は室町  
たら

10x20

[115]

(118)

つたので、えんには家しきねあつた。後  
で先生の写真を借りてお片した。その後、  
は誰の紋も先生のを穿けて、(梅)梅蔵が  
本を揃へた。

西井 — とうや(先生の写真を)後、お片  
わがよやくやつたわのわ。お片は夫れで、お片のや  
り方を覚えてお片のわ。

玉袋 — 自分(梅)梅蔵)やつて、お片は解  
川村 — 先生の写真を借りてお片のわ。

10x20

[118]

(117)

集めては夫れを解剖して研究してゐられたの  
を覚えてゐる。

川村 — 梅蔵(先生)が学校に入られた年か  
思ふ。生徒と一掃(梅)梅蔵)の片に先生に行つた  
りかある。その時、梅蔵(先生)が休んだら、そ  
の頃、お片(梅)梅蔵)があんたら、梅蔵(先生)が描いてくれ  
んか、梅蔵(先生)が描いた。よし描いたら、と言われ  
て先生が(梅)梅蔵)の筆を懐か(梅)梅蔵)を渡ませ、  
袋を掛けた。今でも、梅蔵(先生)の筆は、お片(梅)梅蔵)か  
その頃、お片(梅)梅蔵)が、先生の写真を借りてお片(梅)梅蔵)の

10x20

[117]



(124)

はるる。夫れで僕は人生  
 世にうた。  
 どの防言にには中島春鶴、中村春楊、高山  
 春波の三つが居た。其部屋は台所の近くで、  
 ホン近くに酒樽が据えてある。奥とは大分離  
 れるので、ほっこりした時など茶碗をキニウ  
 ツてやる。おめは分らなかつた。か、いくら  
 少しおどろき終つた。うちに到着知れて叱ら  
 れた。御池には穴庫があつて中にいんが何  
 枚も何枚もしまつてある。今中さんのおおと  
 高山君と二人で

10x20

[124]

(123)

全部刺かせと言はれて、白く白くしはる  
 かあつた。あの頃は先生が「徳は敵後たつ  
 た。  
 拂—お出免か、フロックコートで留へら  
 れると、塾生がウソと詰掛つて来るので、  
 徳上着をとらねた。徳上着の紐は、つとと、  
 なるかあつた。  
 西井—厚紙は半紙を描く研究会があつて  
 いくらやつてお思ふ様に描けんので、いつ  
 間にか右に力描き描いたの半紙が山の形  
 ↓言岡米田の追憶

10x20

[123]

(126)

黨がつたので、魚い、踏ま籠に入つてあつた。菓  
 子を盗み出して来た。あつた。  
 川村—台所が、酒を盗み出す時、樽の栓  
 がキコ—ツと鳴るので、女中さんに井戸の鞆  
 ④で着立て、女中さんと云ふ話があつた。  
 者一人—高山さんと二人、狐にだまされは  
 った。あつた。  
 西井—さうく、高山君と二人、狐が云  
 十歩か一日三十分か持つて、舞臺の向に空  
 生に行つた時つた。帰りに全津に来た。う

10x20

[126]

(125)

んを味方にして置いて、さつと盗出して、おどろ  
 け、半折の山の中に隠して置いて、先生が園楽さ  
 んと、徳に徳に散米に出られると、さつと  
 持出して、二階で盗みながらやつた。おんた。或  
 り、おどろけ、おどろけ、おどろけ、おどろけ、  
 来た。おどろけ、おどろけ、おどろけ、おどろけ、  
 に出血した。僕はおどろけ、おどろけ、おどろけ、  
 高山君は、おどろけ、おどろけ、おどろけ、おどろけ、  
 後方に小さくなつておどろけ、おどろけ、おどろけ、  
 を却々上り得なかつた。あつた。春江君は、甘

10x20

[125]









(144)

念 役の観音力  
 敬 神愛國思想

庄田——嘗て師匠が説きられた事はこんど  
 かあつた。若い頃天龍寺の神山和尙を訪問し  
 て、酒々となげ観音力を説いたところか、和  
 尙から大愛徳められた得意はなつて帰るとか  
 いると、空如和尙が、今後いてみた観音観音の  
 力をあつて師匠、と言つて此方か蘭語とい  
 へると一喝を喰はされた。決して此一喝は信  
 つて悟悟したとかいふか、云ふ訳ではないか、  
 帰りに見ると一喝が下を打ちたか、  
 掃いたりして、行きに見た時は、  
 17

[144]

(143)

川村曼舟 中島春鷗 村瀬秀月  
 植中直齋 久保田竹之 古谷一日光  
 小村大雲 三宅鳳白 庄田鶴友  
 匡子未工人 朝子清光氏

[143]

(146)

入つてあられたと思ふ。  
 之傳分——入教當時の事か、何かの  
 事か、文香傳と云ふ人達と一語に師匠が富山  
 に登られたり、お供しての帰りに道で、師匠  
 から嶽山和尙の事か、お供したか、  
 か地時代か、たか、お供したか、  
 建仁寺に通はる。えらい、  
 とあつたか、お供したか、  
 小村——師匠の信仰に感して一言に言ふ

[146]

(145)

め、勤をさせられたら、たると云ふ位に外務  
 へられなかつたか、今体案に早く見えた。  
 世の中の仕事は皆徳山、たか、と云ふ風に  
 諒々として、  
 られなかつたか、  
 村瀬——師匠からよく観音の頭巾か、と  
 云ふ事か、  
 是人局の力強、  
 此心か、  
 其師匠は、  
 10x20

[145]

(148)

てあられた。師匠はいつか、人目の行は微  
細なるあふせたいわぬ。わしは、（注）、  
前封をとしてゐる時一夜中膝まくつた。か  
かた、と言ふ事があったのを聞いて、  
私は師匠と対面する時に、（注）、  
事にしてゐた。夫れを感ずる時、（注）、  
の門下中、最も一人は、（注）、  
わしと、（注）、  
の、（注）、  
頭は、（注）、

10x20

[148]

(147)

、師匠の天分と禪とがピッタリとあつた。は  
、師匠の折々のお強や内作、（注）、  
えりか、（注）、  
地に入るを念じてゐられたと思ふ。始終と  
外に重宝を垂りてゐられた。  
川村—（注）、  
念が、（注）、  
行して強く師匠の心を鎮してゐた。師匠は  
事には、（注）、  
糸を、（注）、

10x20

[147]

(150)

植申—師匠は特別に細工さね、（注）、  
つらぬらぬて、夫れに親言を出され、（注）、  
さねらぬた。私は、（注）、  
九州、（注）、  
御、（注）、  
洗面の後、（注）、  
とあらぬ、（注）、  
源、（注）、  
申島—（注）、  
ご、（注）、

10x20

[150]

(149)

、（注）、  
流しと、（注）、  
の、（注）、  
た、（注）、  
た、（注）、  
今日、（注）、  
設計、（注）、

10x20

[149]





後藤氏の信義  
門第教養の誠

(159)  
古谷——文彦井後世五周年祝賀会が東京で  
行はれたのを奉引された時、私も記念品を  
にお供して参上した。式後宴会が催され  
丁度お宴会の満ち溢るの時に、甚木十郎先生  
が選座に旅行される為には東京野を立休る  
と云ふので、宴会に別な主人が打揃って  
殿に見送りに行つた。師匠はついでに  
たが、甚木一丁に殿が番長で丁氏と云つた。  
丁氏は大種家の間之島の人で、其時既に大  
分回つてゐたが師匠に、先生一丁の前に  
10x20

[159]

(160)  
を奉——に上りまゐりと思つてゐるが、今  
一軒は非常ななくちやなぬ所がある。夫  
れをいふせてお説教した。たいのへちか  
二がいますか、と言ふ。其時先生は大分  
つものうれづかしに、其申をしたらして  
か、丁氏の申言が、と快くお供をしませ  
る。お供をした。其時は其時番長と云つた  
か、お供をした。二人で師匠に、いへば  
行つた。お供をした。二人で師匠に、いへば  
義塾へらした。師匠はいや、丁氏が  
10x20

これらつくりしてゐられたらとお勧めです。

[160]

(161)  
奉ると云ふのは、お供をした。其時先生は、  
丁氏は大分回つてゐたが師匠に、先生一丁の  
前に、甚木一丁に殿が番長で丁氏と云つた。  
丁氏は大種家の間之島の人で、其時既に大  
分回つてゐたが師匠に、先生一丁の前に  
10x20

[161]

(162)  
ら丁氏の番長が、お供をした。其時先生は、  
丁氏は大分回つてゐたが師匠に、先生一丁の  
前に、甚木一丁に殿が番長で丁氏と云つた。  
丁氏は大種家の間之島の人で、其時既に大  
分回つてゐたが師匠に、先生一丁の前に  
10x20

[162]





(172)

主田——中三郎時式の時がたは(主田) 意あ  
 り傳らざる後りて師匠の指られた指張を指つ  
 て立って掛けた。夫は体言中の老松の何白  
 の後で、胡粉で塗上った舌が美事に仕上り  
 ねたのに、黒墨と松粉を入れた後たつ  
 た。ところがどうした拍子だったか、袴かさ  
 わつて胡粉のまの上に松粉の墨がスーッと一  
 つ解れに走つてゐる。それは吃驚と(主田) 意あ  
 して、どうにも付加がたく(主田) 意あ  
 だて見えないうちなまは立ちすくんでしまつた。

10x20  
 主田

[172]

(171)

と言はれる後指張を止せや、傳らざる後りて行  
 くと、いきなり「ドク」と後の上から降りて  
 けられた。それは(主田) 意あして、どうも見てゐると、  
 豊水がえ、お前はもう死んでゐる。明日の  
 夜来い、と言はれるやうなうでえ、。明日の  
 夜来いやらと驚かつかう、果敢の指張行つて見  
 ると、かろくは乾いた指の指分を裏かつかう  
 ンくと指分はちと、ボロりと指が(主田) 意あ  
 て同時にその指分は指張に別れてゐた。それ  
 はこんな技術もこんな風にして教へられた。

10x20

[171]

(174)

眠らねとせぬと言ふと、そんなら(主田) 意あ  
 車之場や、と言はれる。丁も又たつたので物  
 く焼いて、肉は指が乾いたハヤヤいひ来たりの  
 舌裏から指ンくと和るとおはりと別れた時  
 に墨の跡がまくなつてゐたのでおつとした  
 事だつた。

二條新町が今から帰ると師匠の(主田) 意あ  
 には(主田) 意あして、指張を止せや、傳らざる後りて行  
 くと、いきなり「ドク」と後の上から降りて  
 けられた。それは(主田) 意あして、どうも見てゐると、  
 豊水がえ、お前はもう死んでゐる。明日の  
 夜来い、と言はれるやうなうでえ、。明日の  
 夜来いやらと驚かつかう、果敢の指張行つて見  
 ると、かろくは乾いた指の指分を裏かつかう  
 ンくと指分はちと、ボロりと指が(主田) 意あ  
 て同時にその指分は指張に別れてゐた。それ  
 はこんな技術もこんな風にして教へられた。

10x20

[174]

(173)

残り(主田) 意あして、どうも見てゐると、  
 豊水がえ、お前はもう死んでゐる。明日の  
 夜来い、と言はれるやうなうでえ、。明日の  
 夜来いやらと驚かつかう、果敢の指張行つて見  
 ると、かろくは乾いた指の指分を裏かつかう  
 ンくと指分はちと、ボロりと指が(主田) 意あ  
 て同時にその指分は指張に別れてゐた。それ  
 はこんな技術もこんな風にして教へられた。

10x20

[173]

(176)

考つた法みぢやなかつたかと思ふ。夫れが或  
 る時ラニフに火が入つて、大きな洋燈がつか  
 かつワイツと火が燃え上つたので、皆吃驚し  
 て大騒ぎをやり、師匠はそこはあつた金の  
 衝立をひき取らうとすると、フスツと振れてし  
 まつて消えはしない。階下から薪を拾うと  
 上つてやつと沙汰とあつたが、あの時こんな騒  
 ぎの時でありなかつた。金や衝立は勿論ない事  
 をしちと思つた。何心の甘味師匠は大分いじ  
 め火傷のやまれたと思ふ。

10x20

[176]

(175)

とうち師匠の所を嫌ひた由のた。少い未  
 あ申のこやな、と云ふ返事たりたりすると、  
 申のこかえんぢらわしなるぢや、と云ふ返事申  
 かんぢらゐた程だつた。明治四年の事だ、  
 師匠の三十六と云ふ頃だ。是時分は教習  
 と、晩年の師匠の弟子扱ひは儀やかにはされ  
 たりた。四五年前  
 其時此の事だ。先づ如月分で掘らた  
 国書を約燈に映して終つては、此の如く  
 かあつた。是れは此の師匠の刻書に  
 参考書に

はと

10x20

[175]

大津市歴史博物館調査報告書10  
春挙翁追懷座談会

編集・発行

大津市歴史博物館

〒五二〇—〇〇三七

滋賀県大津市御陵町二番二号

電話 〇七七—五二二—二一〇〇

発行日

令和七年（二〇二五）三月三日

印刷

有限会社 竹田膳写堂